



Asahikawa Medical University
Environmental
Report 2015
環 境 報 告 書





旭川医科大学学章

雪の結晶により北海道を、旭川市民の木「ナナカマド」により旭川をイメージすることができ、その中央の医大の文字により、北海道の中央にある「旭川医科大学」をイメージしています。



旭川医科大学ブランドマーク【コンセプト】

旭川医科大学のイニシャル「AM」をストライプで図案化しています。

また、右上がり跳ねる様は、豊かな自然の旭川から医療人および研究者を育成し、地域に根ざした医療および福祉のさらなる向上(発信)を表現しています。

紫は、ラベンダーの景観や医療の英知・国際貢献、緑は再生や生命の輝きを意味しています。

旭川医科大学環境方針

◆ 基本理念

旭川医科大学は、自然豊かな北海道の北部・東部の中心にあり、その教育・研究及び診療などに伴う全ての活動において、人と自然が調和した社会環境の保全・改善のために配慮が必要と考え、常に環境に配慮した取り組みを目指します。

◆ 基本方針

旭川医科大学は、基本理念を実現するために、以下のことについて実施します。

- 1 本学における教育、研究及び診療において、人と自然が調和した社会の環境を保全・改善することに努めます。
- 2 地球環境の保全・改善のため、地域社会との連携を強め環境問題の解決に努めます。
- 3 環境関連法規、条例及び協定を遵守するとともに、環境に与える負荷の低減に努めます。
- 4 この環境方針を達成するために、職員及び学生などと協力して環境に配慮した取り組みの実施体制を確立するとともに環境目標を設定し、広く公開します。

国立大学法人 旭川医科大学長 吉田 晃敏

CONTENTS

01

旭川医科大学学章
 旭川医科大学ブランドマーク【コンセプト】
 旭川医科大学環境方針
 CONTENTS
 ごあいさつ

03 教育・研究

旭川医科大学のミッション
 ミッションの再定義
 学生のキャリアプラン支援と相談体制充実強化
 環境教育の紹介(2015年)
 図書館のリニューアル
 わくわくサイエンス 子供達のためのサイエンスカフェ
 不安の研究から環境保護へ オオカミ尿由来のP-mixによるシカよけ
 高大病連携による「ふるさと医療人育成」
 旭川医科大学と深川市立病院との連携協力協定調印式を行いました
 旭川医科大学と旭川市との包括連携協定の調印式を行いました

09 病院運営

二輪草センター
 臨床研究支援センター開設
 「旭川医科大学病院いきいき健康フォーラム」開催
 胸腔鏡を用いた低侵襲僧帽弁形成術
 耳鼻科等外来エリアの拡充
 1歳児にも生体肝移植
 見えない人のための便利グッズ体験会
 医療安全管理部が「医療の質・安全大賞」にて奨励賞

15 社会・国際貢献

米国熱帯医学・衛生学会国際名誉会員に推挙されて
 旭川医大IFMSA ～Think Globally Act Locally～
 薬物使用の怖さを訴え～高校等への派遣講座～
 障害者クロスカントリースキー・ワールドカップ旭川大会における協力活動
 北海道ブロックDMAT災害実働訓練参加報告
 地域に密着した救急医療の充実(ドクターカー)
 「スポーツと健康」シンポジウムが開催されました
 北海道メディカルミュージアム
 AWBC学生組織「はしくす」2014年度の活動
 旭川医科大学派遣講座実施状況
 公開講座実施状況

21 環境配慮活動への取り組み体制(大学概要)

位置図／キャンパスマップ
 組織機構図
 法人役員数等
 実施体制
 大学教育及び病院理念と目標
 環境目標・計画と自己評価(平成26年度)
 環境報告書記載事項等の対応表

25 事業活動に伴う環境負荷低減への取り組み

太陽光発電
 グリーン購入・調達状況
 旭川市の気象条件
 エネルギー・資源の使用量

29 認定証・指定書／第三者意見

認定証・指定書
 結び・編集後記
 第三者意見
 環境報告書の作成に当たって



ごあいさつ

旭川医科大学は、1973(昭和48)年の建学以来40年余、「地域医療に根ざした医療および福祉の向上」の建学理念の下、広く北海道における医学の教育・研究の拠点として、重要な役割を担ってきました。

特に、地域間の医療格差是正を目指して、1999(平成11)年、全国に先駆けて設置した遠隔医療センターは、現在までに日本国内のほか、アジアやアメリカなど国外へも拡大し、いまや59の国内外の医療機関とネットワークを形成しています。

これら最先端ICT技術が融合した施設とともに、本学が誇るかけがえのない「宝」といえるのが、遙か大雪山連峰の山並みを望む豊かな自然環境です。寒暖差60℃を超える厳しい気候風土が、四季折々を通じてドラマチックな風景を演出しています。

とはいえ、加速する地球温暖化の影響から、私たちの街もまた逃れることはできません。旭川は、1902(明治35)年1月に、正式の気象観測所の記録としては日本の最低気温となる、 -41°C を記録した地としても広く知られていますが、近年の最低気温は -25°C 前後となっていて、平均してここ100年で 10°C ほど上昇していると考えられています。気温が 1°C 上がると、緯度が 100km 下がったのと一緒と言われていますので、緯度が $1,000\text{km}$ 下がったことになります。

地球温暖化の進行により、「これまで経験したことのないような」集中豪雨、「記録的な」大雪・猛暑等の異常気象の発生が増加しています。

環境の急激な変化をもたらしているのは、私たち人間の所業です。

振り返ってみれば、この地球の歴史は、人間が引き起こした過ちによって、しばしば大きな代償を支払わされてきた歩みでもあります。2011年3月に発生した、東日本大震災の大惨事は、人間の傲慢さと、それに対する代償の怖さを見せつけています。

環境問題を地球規模で考え、地域で行動していくには、どうすればいいのか。

地球環境をこれ以上破壊しないよう、省エネ、節水、ごみの減量・再資源化等、資源の有効活用等に努めることが大切です。

次世代へと命をつなぐ、この「かけがえのない地球環境を守っていくこと」は、命と向き合う医療現場に身を置く私たちにとっても、極めて重要な使命です。

本学のミッションを果たすべく、教育・研究・診療・社会貢献の分野で教職員が一丸となって、新たなチャレンジを続けていくとともに、地球環境の保全を重要な課題と位置づけ、私たち大学人が、自らの責任を自覚し、日々の具体的行動へとつなげていくことを、ここに宣言いたします。

国立大学法人 旭川医科大学長 最高環境責任者 **吉田 晃敏**

旭川医科大学のミッション

◆ 医学科のミッション

旭川医科大学の建学の理念に基づき、地域医療に根ざした医療・福祉の向上に貢献する医師・研究者等の養成を積極的に推進する。特に、道内の高校や医療機関と連携し、地域医療に対する強い意欲・使命感を持った学生の積極的な受入れを推進する。

北海道の医療支援の実績から発展した遠隔医療の研究、高齢化に対応した脳機能医工学研究の推進等、地域特性に対応した様々な研究を始めとする研究の実績を活かし、先端的で特色ある研究を推進し、新たな医療技術の開発や医療水準の向上を目指すとともに、次代を担う人材を育成する。

橋渡し研究支援拠点として、基礎研究成果の臨床への応用を強力に推進することにより研究成果の実用化を図り、日本発のイノベーション創出を目指す。

北海道と連携し、道内の地域医療を担う医師の確保及びキャリア形成を一体的に推進し、広大な北海道の医師偏在の解消に貢献する。

地域がん診療連携拠点病院、救命救急センター、地域周産期母子医療センター、地域災害拠点病院等として、地域医療の中核的役割を担う。

◆ 看護学科のミッション

旭川医科大学の建学の理念に基づき、地域医療に根ざした医療・福祉の向上に寄与するため、豊かな人間性と思考力、高い倫理観を有する看護職を育成する。特に、臨地実習までの学習成果を確認し客観的臨床能力試験(OSCE)を導入するとともに能動的学修空間を整備するなど、学生の意欲に応えるため、教育内容や学修環境を充実させ、教育効果を高める。

がん看護専門看護師を始め急激な高齢化に対応した高度専門的人材や指導的な人材を育成するとともに、看護職の復職支援等によって看護師不足に対応し、道北・道東を始めとする地域の医療へ貢献する。

遠隔看護の研究等の取組を活かし、広大かつ厳しい気候条件にある道北・道東を始めとする地域の住民の健康保持に貢献する。発展途上国の保健行政・母子保健における医療人材の育成の取組を活かし、国際性豊かな医療人を育成し、国際社会への貢献を目指す。

ミッションの再定義

文部科学省は、平成25年12月18日に医学系分野、平成26年4月21日に保健系分野（看護学・医療技術学、学際・特定）に係る国立大学のミッションの再定義結果を公表しました。

ミッションの再定義とは、各国立大学と文部科学省が意見交換を行い、研究水準、教育成果、産学連携等の客観的データに基づき、各大学の強み・特色・社会的役割（ミッション）

を整理したものです。

これに基づき、本学としては、今後、大学の強みや特色を伸ばし、さらなる教育・研究・医療の発展、意欲ある医療人の育成など、その社会的役割を一層果たしていくための機能強化を図っていきます。



学生のキャリアプラン支援と相談体制充実強化

本学では、これまで、授業科目担当教員によるオフィスアワーや学科・学年別の学年担当教員配置、さらには基礎医学、臨床医学、看護学科及び一般教育の各担当学長補佐4名と学生との意見交換会を定期的で開催して学生の意見・要望を支援方針に反映させるなど、きめ細やかな指導と教育の充実に努めてきました。

2013年度からは、医学科における修学指導体制をより強化し、卒業後の臨床研修や、将来の地域医療貢献イメージの具体化に向けたアドバイスなど、学生のキャリアプランを支援するため、新たにグループ担任制度の運用を開始しました。

グループ担任制度は、医学科第1学年及び第2学年を対象とし、10名程度の学生グループ毎に臨床医学系の担任教員1名を配置し、学年担当教員と連携して指導・相談を担うほか、年2回、グループの学生と担任との交流会を開催しています。低学年時から臨床教員との接点をより増やすことにより、臨床現場、医療を取り巻く状況や地域医療に対する正しい認識を促すとともに、医師としてのキャリア形成に向けた動機付けや

社会への貢献意欲涵養などの効果が期待されるところです。

また、医学科では、高学年の地域枠学生に対しても、医療人としてのモチベーションを高め、また将来に対する疑問や不安を解消する目的で、卒後臨床研修や卒業後のキャリアプラン支援に関する学長や関係教員による懇談会を開催するなどの指導活動にも取り組んでいます。本学は、地域医療に根ざした医療・福祉の向上に貢献する医療者育成という教育の理念のもと、医学科入学定員122名に対する地域枠募集人員が計55名(45%以上)という高い比率となっており、今後、地域枠学生が順次卒業し、卒業生による地域医療への更なる貢献が望まれるところです。

さらに、2014年度からは、医学科第1～3学年の各学年にそれぞれ1名の臨床教授をアドバイザーとして配置し、各学年の学年担当教員や、学生のキャリアプラン支援委員会と横断的な連携をとりながら、キャリアプラン支援や学生が抱える様々な問題に対応しています。

環境教育の紹介(2015年)

授業主題	授業の内容	担当教員
人を取り巻く環境と人の適応と健康	人類が生存することがエコシステムに与える影響、さらに、人を取り巻く環境が人の健康状態に及ぼす影響について概説する。	吉田 貴彦
エネルギー・環境問題	日本および世界各国のエネルギー情勢および地球環境問題を理解し、それに対する解決策の一つとして、電気エネルギー関連技術を中心とした省エネルギー・省資源・環境保全などについて学習する。	井口 傑
環境と細胞・遺伝子	生体は個体・組織・細胞・物理化学変化・生体分子という階層からなるシステムである。外部環境との関係を特に細胞や遺伝子のレベルから考察する。	秋田谷 龍男
人が暮らす日常生活環境から受ける健康影響	主にシックハウス症候群・シックビルディング症候群の原因、対策について学ぶ。	西條 泰明
地球温暖化問題と低炭素社会の構築1	地球温暖化の仕組み・原因物質、低炭素社会構築の可能性・必要性。	張 興和
地球温暖化問題と低炭素社会の構築2	クリーン開発メカニズムによる日中間協力、われわれにできること。	張 興和
酸性雨の原因とその現状	酸性雨は、ヨーロッパでは「緑のベスト」、中国では「空中鬼」と呼ばれ、近年わが国でもその被害が拡大している。	安藤 秀俊
環境生物と病原体	自然界でのヒト病原体の存続様式と、環境生物がこれら病原体のReservoirやVectorとなる機序を学び、自然環境の変化に伴うヒト感染症の変遷と、その対策に関する理解を深める。	吉田 逸朗
環境ホルモンと食の安全	人間活動の結果として環境中に放出された環境汚染化学物質が、野生生物の生殖機能に影響を及ぼすことが指摘され、ヒトでも同様の影響が危惧された「環境ホルモン問題」について学び、食の安全についても考える。	中木 良彦
環境と寄生虫病	寄生虫感染症は、現在の日本ではあまり馴染みが無いかもしれないが、世界的に見ると未だ猛威を振るっている。そこで、その背景にある環境と寄生虫感染症の密接な関係について学ぶ。	迫 康仁
森林環境が持つ健康保養効果	森林療法の科学的根拠とその健康づくりへの応用について学習する。森の香りの持つ自律神経系/バランス改善効果、抗ストレス効果、血圧安定化作用のメカニズムの概説。海外の事例紹介など。	住友 和弘
節足動物と環境医学	異常気象や災害が感染症に及ぼす影響について、節足動物媒介性疾患を中心に解説する。	中尾 稔
生活環境における放射線	放射線の人体への影響を理解し、通常的生活環境の中で被曝する自然放射線の種類・線量・人体への影響や人工放射線による環境の汚染、医療放射線被曝の考え方について学ぶ。	高橋 康二
環境衛生と感染症とアレルギー	環境衛生が整うと感染症は減少する。一方で衛生的になるとアレルギーが増加するという説もある。さて我々のとるべき道は？	長森 恒久
ライフステージにおける環境問題	環境因子がヒトの健康に及ぼす影響について学ぶとともに、個々の環境因子に対する感受性がヒトのライフステージでどのように変化し得るかを考える。	伊藤 俊弘

図書館のリニューアル

図書館は、平成27年4月に約1年半にわたる増改修工事を終了し、リニューアルオープンいたしました。今回の増改修工事では、耐震補強のほか、照明の完全LED化、外断熱壁による耐久性の向上及び効率的な空調によるエネルギーコストの低減、館内消費電力の可視化など、環境に配慮した建物、またバリアフリーな利用者動線が可能な建物を実現しました。総面積は、これまでの1.5倍の2,754㎡となり、配架スペースに余裕ができたため、1階の学術雑誌、2階の専門図書ともに並べ替えを行い、従来よりも資料が探しやすくなりました。

このほか、増築した南棟には、静かに学習・読書ができる座席が2階に100席、多様なグループ学習・プレゼンテーションが可能なディスカッションスペースが1階に70席あります。また、文献検索・レポート作成に用いるためのパソコン席は全館で44席あり、学生・職員の様々な利用に応じています。

平成26年度には、南棟のディスカッションスペースのシンボルでもある木製書棚前で、小規模な講演会を開催しました。10月初旬に市内大学連携コンソーシアム主催、図書館共催で行った「リレー講演会 1時間でわかる三浦綾子!」では、学内

を始め連携大学や三浦綾子記念文学館（旭川市神楽7条8丁目）の関係者も来館し、熱気ある講演が行われました。10月下旬に開催した本学教員によるサイエンスカフェでは、「進化」をキーワードに、からだの自然史についてそれぞれの切り口で講演が展開されました。引き続いての会場との質疑応答では、それぞれの教員から学術的見地にウイットを盛り込んだ回答がなされ、最後は満場の拍手で閉会しました。

今後、図書館が学内の「知のコミュニケーションの場」として活用されるよう、様々なイベントや展示を行っていく予定です。



図書館1階 カウンターとパソコン席



図書館書架



図書館2階 サイレント学習室

わくわくサイエンス — 子供達のためのサイエンスカフェ

自然や科学の面白さ、不思議さ、楽しさなどを体験してもらうため、小学生から高校生までを対象とした体験・展示型理科教室を3分野13テーマで開催致しました。同時に、2分野の科学講演会を実施しました。4回目を迎える「わくわくサイエンス」は、毎回、親子で楽しめるサイエンスカフェのような気軽さと楽しさが人気を博しています。高校生や大学生が講師として子供達に接する教育経験の場として、旭川医大を中心に、旭川ウエルビーイングコンソーシアムの主な参加校（北海道教育大、旭川工業高等専門学校）、市内高校、科学館、さ

らには、環境・健康に関わる団体の協力を今年は何年か得ることができました。

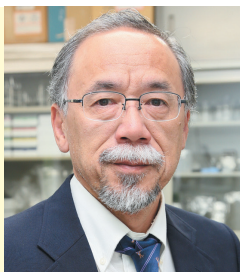
1) 動物学実験：普段目にするのできないコウモリの展示やイカの血液を使った実験では、実物や標本を実際に見たり触れたりすることで、生態系や海洋動物に興味を持った中高生の参加者が目立ちました。マウスの水迷路学習が、小動物の学習行動を観察する子供達には、新鮮な体験学習となりました。蝶やその他の昆虫の顕微鏡観察では、高校生の説明を熱心に聞く親子で賑わっていました。

2) **化学実験**: 試薬色素の消長を指標にしたビタミンCの酸化作用を通じて酸化還元反応を分かり易く理解するコーナーや、森林浴で感じる針葉樹の揮発性物質を体験するコーナーでは、熱心に質問する高校生や一般参加者の姿が目立ちました。健康や疾病予防の効果に興味を持つ生徒からの質問回答のコーナーでは参加者の輪ができていました。

3) **工学・地質学実験**: 東日本大震災以降、地学や地質学的な展示にも興味を持つ参加者が増加しています。各種鉱石の紫外線解析に関するコーナーや火山噴火のシミュレーションに大きな歓声が上がっていました。ロボット工学のブースでは、

小さなロボットの動きに魅せられた子供達とその場を離れないほどの活気がありましたが、ロボットの電気回路の説明を熱心に聞く高校生や市民の姿も印象的でした。

講演会では、内島みのり氏の「音楽療法ってなに?」及び柳町隆造氏の「次世代へのメッセージ」が午前・午後で開催され、家族連れ、一般市民、本教室運営の生徒・学生らが熱心に拝聴し、活発な質疑応答がなされました。本教室は、科学技術進行機構(JST)科学技術コミュニケーション推進事業「ネットワーク形成地域型」の支援事業の一つとして実施されました。



不安の研究から環境保護へ オオカミ尿由来のP-mixによるシカよけ

生理学講座 神経機能分野 柏柳 誠

我々の研究室では、テーマの一つとして不安・恐怖を誘起する匂いについて研究しています。抗不安薬の効果と作用機序の検討、さらに、不安を惹起する脳内経路の解明には、再現性のよい不安・恐怖の惹起が必要となります。我々は、オオカミ尿に含まれるピラジン誘導体(P-mix)が実験動物として広く使用されているマウスやラットに不安・恐怖行動を引き起こすことを明らかにしました。また、本学病院で一番多く処方されているエチゾラムは、P-mixがマウスに引き起こす恐怖関連行動を軽減することを見いだしています。

この研究のきっかけは、私が学会長を務めている「日本味と匂学会」の2009年大会を旭川で開催した時に遡ります。特別講演をいただいた旭山動物園の板東元園長は、オオカミの尿がシカの忌避剤としてアメリカで使用されていることを話されました。大会が終了するやいなや、オオカミ尿を

購入して数匹のマウスに提示してみると、マウスは不安を感じてひとかたまりに寄り添っていました。そこで、北海道医療大学の長田和実先生と共同研究を開始して有効成分であるP-mixの同定にいたりしました。

おもしろいことに、P-mixはエゾシカに恐怖行動を引き起こしました。そもそも、北米でシカなどの害獣の忌避剤として使用されているオオカミ尿中の成分なので、エゾシカにも効果があるのは想像できます。しかし、統計的な検定に耐えるレベルで半野生動物への効果を検証することは難しいことです。宮園貞治助教は、60頭を超えるエゾシカの一頭ずつの行動を丹念に解析し、その結果はインパクトファクターが4を超える雑誌に掲載されました。医薬品の副作用は困ったものですが、医学研究の副産物としてオオカミ尿由来のピラジン誘導体・P-mixが、北海道で60億円前後におよぶエゾシカによる農林被害の軽減に貢献できることを期待しています。



エゾシカはP-mixを設置したシート(写真左)のエサを避ける

高大病連携による「ふるさと医療人育成」

本学では、地域医療を支える様々な人材の育成を続けています。その一つとして、地域の医療問題を抽出し、適切に対応できるプロフェッショナルの育成が挙げられます。このように地域に根ざした医療を考え、それを実践していける人材を「ふるさと医療人」と名付けました。こうした人材を育成するには、まず地域に親和性の高い若者を育てることが重要です。本学では入学前から入学後の学部教育・卒後臨床研修にいたる医学教育の中に一貫した人材育成の仕組みを作り、地域への親和性が高い若者を育てる取組を2008年度から始めています。これが「高大病連携によるふるさと医療人育成の取組」です。

この活動は「平成20年度文部科学省選定 質の高い大学教育推進プログラム(教育GP)」に採択されました。補助は期間限定で平成22年度に終了していますが、学長をはじめとする学内の支援もあり、現在も活動は続いています。

「地域社会が地域の医療者を育む」ことを重視し、大学での人材育成プログラムを改善するだけでなく、地域社会と連携した人材育成を行うことに重点を置いていることがこれらの活動の大きな特徴です。

事業の大きな柱は3つです。1つめは入学前からの「医療人としての職業観」の自覚を促すことです。具体的には高校生に対する医療体験実習・ワークショップの提供を行っています。2つめは入学者選抜における地域枠の拡大です。3つめは「一貫した重層的地域医療教育」を整備することです。

1つめの取組では、全道各地の医療機関・進学校と協力し、高校生に「医療体験実習」を提供しています。「高校生のためのインターンシップ」と違う点は、できるだけ体験型の実習を取込み、さらに病院実習の内容とリンクした講演会やグループワークを行っていることです。こうした一連のイベントを継続的に体験してもらうことで、職業観の涵養を促進することを狙っています。参加者も医師志望者に限らず、医療系職種を目指す高校生を広く受け入れる活動が多く行われています。医療系職種を目指す動機を強めるだけでなく、ここで出会った若者たちが将来の地域医療を担う仲間になっていくことが期待されます。

活動が始まった2009年度には13の高校と13の医療機関が参加しました。2014年度は13の高校と10の医療機関で、185名の高校生が医療体験実習に参加しています。

取組開始当初はグループワークや講演会・病院実習を参加高校単位で行っていましたが、しかし最近は複数の高校を対象としたグループワークを各地区で始めています。函館地区では4つの進学校の生徒を対象としたワークショップを2013年

度から始めました。札幌地区では、同じテーマでグループワークを行った2校が合同で医療体験実習を行いました。

また道東地区では高校と病院が独自に取組を進める体制に変わっています。さらに2013年度より、本学教員も参加しての地区別合同ワークショップ(十勝地区・釧路地区)も開催されています。

高校生の活動の集大成として、毎年3月に「高校生による医療体験活動報告会」と「高校生による地域医療討論会」を開催しています。「高校生による医療体験活動報告会」は今年で6回目で、口演発表10題、ポスター発表6題、資料発表7題が行われました。同日午後からは、「第5回高校生による地域医療討論会」が行われました。全道から13校114名の生徒たちが集結しました。今年度からは全体討論会ではなく、ワールドカフェ形式で「地域医療を支える仕事」について小グループで話し合い、まとめてもらいました。

こうした取組を開始してから、本学入学者の約10%がこの取組を体験しています。今では取組を体験して入学してきた学生をはじめとした地域医療に関心の高い学生たちが、母校の高校のグループワークなどのイベントに参加してくれるようになってきました。

2つめの取組は入試改革です。地域に根ざした医療者の卵を迎え入れるべく、医学科に地域枠推薦入試・AO北海道地域枠入試を導入しました。改革前には入学者のうち北海道出身者の占める割合は40%未満でしたが、現在は約60~80%が北海道出身者となっています。

3つめの取組は「重層的地域医療教育」の構築です。前々カリキュラムで導入された早期体験実習や僻地医療実習に、さらに一層の連続性をもたせるように変更しました。

また卒後臨床研修制度・取組協力医療機関との連携を深め、より地域社会と結びついた「ふるさと医療人」の育成が進むように整備が進められています。



製鉄記念室蘭病院で体験実習を行った室蘭栄高校の生徒：ブタの心臓を用いた心臓弁置換手術に挑戦しました。指導は大谷則史副院長

旭川医科大学と深川市立病院との連携協力協定調印式を行いました

平成27年4月2日（木）午後3時30分から「国立大学法人旭川医科大学と深川市立病院との連携協力協定調印式」を行いました。

この連携協力協定は、旭川医科大学と深川市立病院が連携、協力し、住民が健康で安心して生活できる地域福祉の向上のため、地域医療の安定的な医療体制を確保することを目的としています。

深川市立病院が、旭川医科大学医学科に在籍する学生及び卒業生に対し修学資金を貸与し、一定期間、深川市立病院で臨床研修を受けていただくことにより、深川市の地域医療の現状を知っていただき、将来に向け安定した地域医療の形成を目指すものです。

協定の期間は、平成28年3月31日までとしていますが、いず

れかからも終了の申し出がない限り、同一の内容をもって更新されます。



吉田晃敏旭川医科大学長（左）、山下貴史深川市長

旭川医科大学と旭川市との包括連携協定の調印式を行いました

平成26年6月17日（火）旭川市役所において、旭川医科大学と旭川市との包括連携に関する協定の調印式*を行いました。

この協定は、旭川市と大学相互の発展のため、まちづくり、地域産業の活性化、医療、保健及び福祉等への取組を通じた連携の強化を目的としています。

【主な連携・協力事項】

- ①教育、文化及びスポーツに関すること。
- ②医療、保健及び福祉に関すること。
- ③まちづくりに関すること。
- ④地域産業の活性化に関すること。
- ⑤自然及び環境に関すること。

※旭川市と旭川大学・旭川大学短期大学部、旭川市と東海大学北海道キャンパスの調印式も同時に行われました。



調印式の様子（左：旭川医科大学 吉田学長）



左から山内旭川大学長、西川旭川市長、吉田旭川医科大学長、吉村東海大学学長補佐

二輪草センター



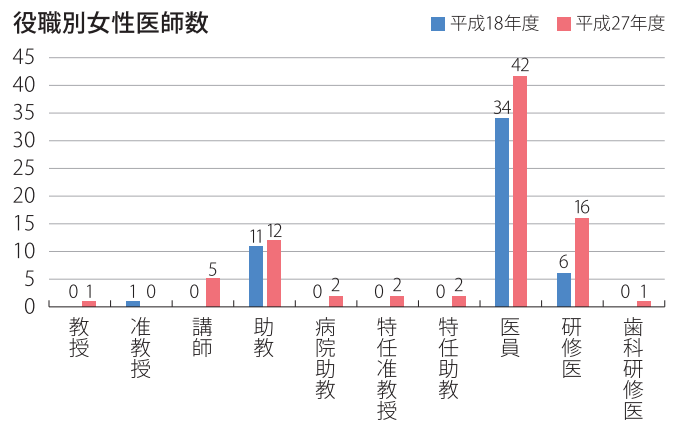
二輪草センターは旭川医科大学と病院の環境を、より働きやすく、学びやすいものとするために2007年(平成19年)10月に開設されました。

- ・大学という地域社会が子育てや、家族の介護を助けます
- ・働きやすく学びやすい環境を整備します

◆ 設立の経緯と歴史、効果

旭川医科大学二輪草センター(復職・子育て・介護支援センター)は、2007年度文部科学省「社会的ニーズに対応した質の高い医療人養成推進プログラム」に採択されたのをきっかけとして同年10月に開設され、2010年度からは本学の組織として活動しています。設立によって、育児休暇取得者の増加、女性医師の常勤者数の増加、看護師の離職率の低下などの効果が得られています。活動は北海道からも高く評価され、2014年には平成25年度北海道男女平等参画チャレンジ賞「輝く北のチャレンジ支援賞」を受賞し、2015年は厚生労働省が子育て支援に積極的に取り組む企業や法人を認定する「くるみん認定」を取得しました。

役割別女性医師数



◆ 復職支援

● 医師・看護師の復職支援教育プログラム

資格を持つ休業者に潜在人材登録をしてもらい、在宅学習用DVDの送付、復職前の実習・実技訓練など、復職をサポートする教育プログラムを提供しています。

● 看護師と助産師のための復職支援研修

旭川市および近郊の看護師・助産師不足の解消と、地域医療への貢献を目的として、毎年3月に5日間の実技や講義を行っています。



● 多様な勤務形態

二輪草枠医員は医師向けの育児短時間勤務制度です。当初は就学前の児童がいる職員が対象でしたが、2012年からは小学校3年生までの児童がいる職員にまで枠を拡大しました。

◆ キャリア支援

● 学生へのキャリア教育

2010年度から医学科3年生にワークライフバランスを考慮してもらった授業を開始しています。2014年度は「キャリアプラン」「出産時期」「職場の同僚の配慮」などについて男女混成の小グループで話し合い、解決策をグループごとに発表。その後、育児中の医師の体験談などを聞きました。



● 合同入局説明会

働きやすい職場を目指して各科でどのような取り組みが行われているか、学生に紹介しています。2014年度は「どうする?臨床研修先」と題して、3名の若手医師にリアルな研修体験を聞き、各講座でポスター展示も行いました。



●医療人と学生のふれあい

「看護学生と看護師のふれあいランチタイム」「医学生・研修医・女性医師の集い」「看護学生と看護師の語る夕べ」といった場を設け、キャリアアップや育児・介護支援などに関する情報提供や意見交換を行っています。



看護学生と看護師のふれあいランチタイム



医学生・研修医・女性医師の集い



看護学生と看護師の語る夕べ

●地域で働く看護職のための生涯学習支援研修

大学病院と訪問看護ステーションの交流を図ることを目的として、訪問看護に必要な知識と技術を再学習する研修を2013年度から開始。2日間の日程で講義と実技を行います。



●二輪草セミナー

学内外の講師を招いて情報交換を行っています。2014年度のテーマは以下の通りです。



第19回
「中堅看護師が語る
心に残る看護エピソード」
(講師:子育てしながら仕事を継続している中堅看護師3名)



第20回
「イクメンパパの日常」
(講師:育児に積極的に参加されている2人のイクメン医師2名)

●二輪草ベストサポーター賞

旭川医科大学で働く職員の上司・同僚・後輩など、現場において子育てや介護をサポートしている方を各部署より推薦していただき、二輪草プラン推進委員会で選出します。

◆子育て・介護支援

①バックアップナースシステム

「子どもが病気の時はそばにいてあげたい」という親の思いを大切にしたいシステム。経験豊富な3名のバックアップナースが代理勤務を行います。2015年度からは、家族の介護が急に必要になった看護師も対象となりました。

②病児一時預かり室

子どもの急な発熱等の場合、代理の勤務者に業務を引き継ぐまでの間(原則1時間)、お子さんをお預かりします。保育士資格のある職員が担当し、料金は無料です。

③キッズスクール

夏休み・冬休みに職員のお子さん20名余りを3日間程度お預かりしています。本学の医学科・看護学科の学生が毎回ボランティアとして多数参加し、学生サークル「ぬいぐるみ病院プロジェクト」の皆さんはダンスや寸劇を交えながら子ども達に授業を展開。2014年度の夏休みは「目の仕組みと働き」、冬休みは「耳のお仕事～聞くこととバランス」というテーマで開催しました。



④託児サービス提供

子育て中の職員が大学病院内で実施される研修会・講習会等に参加しやすいように託児サービスを開始しました。参加必須な研修会等の場合は年に数回、無料(大学負担)。各部署が行う行事で託児が必要な場合には、有料(利用者負担)託児サービスもあります。



⑤病児・病後児保育室『のんの』

「子供が病気だけれど急に休むのが難しい」といった状況に対応できるよう、2009年12月に病後児保育室「のんの」を開設。2014年7月からは病児・病後児保育室として利用対象を拡大しました。4月現在の事前登録者数は92名で、月平均利用日数は2010年度の5.6日から、2014年度は8.7日と増加。病児の急変に備えて、救急部にご協力いただき年に数回の搬送訓練も行っています。

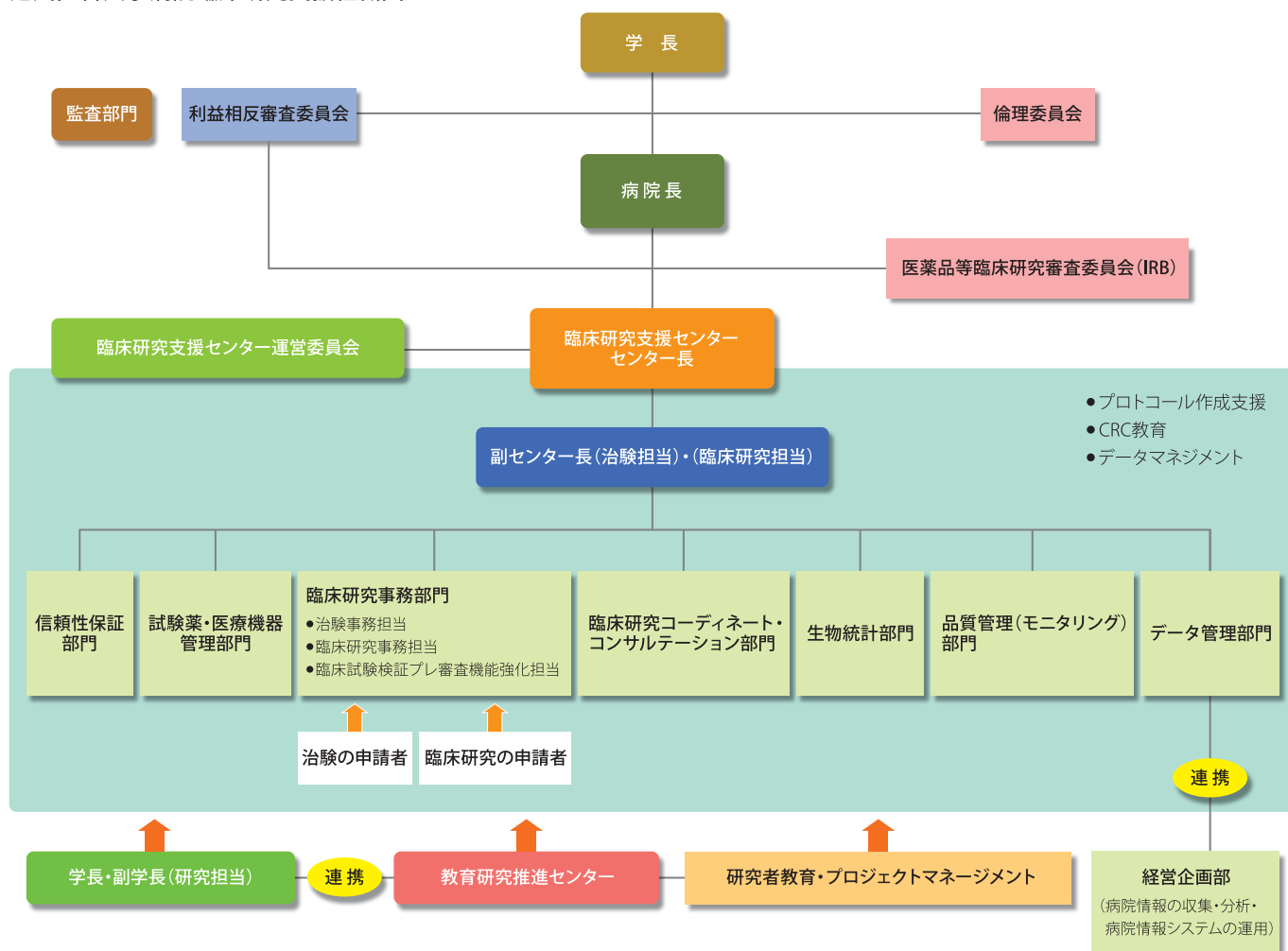


臨床研究支援センター開設

臨床研究体制を強化するため、「治験支援センター」を改組し「臨床研究支援センター」を設置しました。「臨床研究支援センター」は、自主的臨床研究・企業治験の円滑な実施や、有効で安全な医薬品・医療機器・医療技術・治療方法の開発を通じて、広く医学・医療の進歩・発展に貢献するとともに、研究データの信頼性及び倫理性的の確保並びに品質管理を確保することを目的としています。センターには、①臨床研究コーディネー

ト・コンサルテーション部門、②生物統計部門、③品質管理(モニタリング)部門、④データ管理部門、⑤試験薬・医療機器管理部門、⑥信頼性保証部門、⑦臨床研究事務部門の7つの支援部門を置き、質の高い自主的臨床研究・企業治験の実施体制を整備するとともに、本学で研究シーズの発掘・育成・臨床応用までのシームレスな支援を行う「教育研究推進センター」と連携して、新しい医療技術の創出に貢献します。

旭川医科大学病院臨床研究支援組織図



「旭川医科大学病院いきいき健康フォーラム」開催

平成26年7月6日(日)に、旭川医科大学病院として初めての試みとして、旭川グランドホテルにおいて、「旭川医科大学病院いきいき健康フォーラム」を開催しました。

フォーラムの第1部では、レース中の事故により脳と頸髄を損傷し、全身麻痺から奇跡的に回復した元競輪選手の夫を支える宇佐美総子(うさみ ふさこ)さんに、「これまでの軌跡」としてスライドを基に、夫の事故後から現在までの、エピソードやリハビリの苦勞、それを支える妻として実践してきたことをお話いただきました。

また、リハビリとして始めたパン作りに関するお話があり、パン作りの活動がメディアによって広く知られるようになって現在14年待ちとなっている「天使のパン」を通じた心の交流について、パンを購入した方からの手紙を紹介いただきました。



第2部では、レース中の事故によりプロの競輪選手としての職を失い、リハビリのために始めたカラダに優しい無添加のパンを作るパン職人という第二の人生を歩まれている多良良泉己(たいら みずき)さ

ん、宇佐美総子さんと松野病院長のトークショーを行いました。

「日々、実践している元気になるヒント」としてスライドを基に、自宅の建築の際にDIYで内装やガーデンを作られた様子や、趣味とリハビリを兼ねた山登りやアウトドアなどの様子についてお話がありました。



後半では、観客の皆さんからの質問にお答えする時間を設け、宇佐美さん、多良良さん、松野病院長が、「絶望から生へ、復帰に向けての気持ちの切り替え方」、「今後さらに実践していきたいこと」や「高齢になりつまずきやすくなった方への歩き方のポイント」などを、多良良さん夫妻の実体験を基にしたヒントや松野病院長からの医学的なアドバイスなどを交えたトークショーとなりました。

観客の皆さんからは、「ご夫妻の話に感動した」、「前向きに生きていくヒントをいただきました」、「元気をもらえました」等、たくさんの感謝のお気持ちをいただくことができました。

胸腔鏡を用いた低侵襲僧帽弁形成術

外科学講座 心臓大血管外科学分野 紙谷 寛之

当科では2014年5月より胸腔鏡を用いた低侵襲僧帽弁形成術を施行しています。僧帽弁の手術を含め、心臓の手術は通常胸の中央を大きく切り開く胸骨正中切開で行われますが、この手術法では右胸に約6cmの切開と、右鼠径部に約2cmの切開のみで手術を行い、術中に胸腔鏡を用いて内部を詳細に観察します。日本ではまだあまり普及していない術式ですが、世界的にはドイツを中心として積極的に行われています。小さな傷で行われるため、体への負担が少なく、早期退院が可能である点が利点ですが、高度な技術を要します。最近腹腔鏡手術などでの有害事象が世間の話題となっていますが、当科では紙谷の10年にわたるドイツでの経験をベースに、安全に本法を導入しております。現在までに20例の患者さんに対してこの手術を施行し、手術死亡はなく、全例成功しております。今後も北海道での低侵襲心臓外科治療の発展のため、精力的に取り組んでまいります。



耳鼻科等外来エリアの拡充

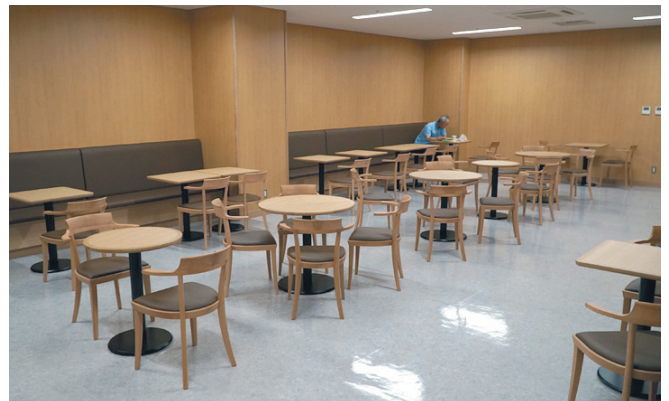
旭川医科大学病院玄関棟1階で閉鎖していた区域の工事が終了し、平成26年9月1日(月)からご利用いただけるようになりました。

1. 「外来10番受付」が新設されました。

今まで12番と23番に分散していた診療科が入り、新しい診察室ができました。外来10番受付は「耳鼻咽喉科」「頭頸部外科」「麻酔科蘇生科」「ペインクリニック」となります。

2. 院内コンビニエンスストア・ローソンの横に、イートイン・スペースが新設されました。

ローソンなどで購入された食べ物、飲み物などを召し上がりながら談話していただく『イートインスペース』を設けました。病院関係者はじめ入院患者の方や外来の方を問わず利用できるスペースとなっています。お気軽にご利用ください。



1歳児にも生体肝移植

外科学講座 消化器病態外科学分野 古川 博之

その男児は2013年7月に出生。8月に発熱で夜間急病センターを受診した際、採血した腕からの出血が止まりにくいことを指摘されました。同時にCT検査で頭蓋内出血を認めたためそのまま入院。血が止まりにくい原因は、胆汁が腸管内に出ていないことによるビタミンK吸収障害によるものと判明、これは、肝臓から十二指腸に胆汁を通す胆管が閉塞する胆道閉鎖症という病気でよくみられる症状。8月22日には、新しい胆汁の経路を作る手術(葛西手術)を行いました。しかし、その後も状態は改善せず、2014年4月からは成長がストップ。これは肝臓が働いていないため栄養を全身に供給できない状態で重症の肝不全を示します。救うには肝移植しかありません。家族もこれに同意、母親をドナーとする生体肝移植を予定しました。しかし、6月28日、風邪をひいた際、突然、呼吸停止

となりました。母親が必死で蘇生して救急車で搬送入院。肝不全による低栄養と体力低下がその原因と考えられ、この体力では肝移植は難しいものと思われました。しかし、小児科チームによる必死の呼吸管理と栄養管理によって、徐々に状態が改善し、最終的には人工呼吸器からはずれて自力での呼吸をすることができるようになり、栄養状態も徐々に改善しました。こうして、体重も7.4kgまで改善することに成功、危機的状態を抜けだしたと判断し、8月20日、生体肝移植を行いました。拒絶反応などの問題はあったものの術後7日目にはミルクの経口摂取を開始でき、術後20日目には離乳食を摂取できるようになり、その後退院となりました。10カ月たった現在、ドナー・レシピエントとも元気であり、チームが一丸となり力を合わせたことによる勝利であります。

見えない人のための便利グッズ体験会

2014年7月26日、8階病棟西カンファレンスルームにて、眼科の視能訓練士による企画「見えない人のための便利グッズ体験会」を開催いたしました。初めての体験会でしたが病棟に入院されている患者様や、以前入院していた方、外来看護師、病棟看護師など27名の方にお集まりいただくことができました。

今回、体験会のメインとなったものは「音声パソコン」です。音声パソコンとは画面の文字を読み上げるなど、音声ガイドにより眼の見えない人でも操作できるように開発されたパソコンソフトです。今回お招きした講師の方はご自身も視覚障害者ですが音声パソコンを仕事や生活で使用されています。また、アドバイザーとしてもご活躍されている方で、実際に音声パソコンのデモンストレーションを行っていただきました。当日はパソコンのキーボード操作をしているところをビデオカメラで撮影し、その映像を大きなモニターに映して参加者に見ていただきました。そして実際にニュースやネットラジオを聴いたり、Skype通信を行っているところを見せていただきました。私たちのロービジョン専門外来では、ルーペや遮光眼鏡、拡大読書器などの紹介をさせていただいています。しかし、音声パソコンについては実際に見る機会がないため、今回のこの体験は我々

視能訓練士としてもとても勉強になりました。

今回の企画は、視覚障害を有する患者様にとって、日常生活をより快適におくるための情報を得る機会が少ないため、「自分達から何か情報を発信できないだろうか?」というところから始まりました。そして、今回のこの活動をきっかけに、今後は実際にグッズを手にとっていただける催し物を行っていきたいと思います。

最後にご協力いただいた、石子先生、眼科病棟阿部師長に感謝いたします。

山本 津香沙



医療安全管理部が「医療の質・安全大賞」にて奨励賞

旭川医科大学医療安全管理部が、「第1回Patient Safety & Quality Award (医療の質・安全大賞)」にて、「奨励賞 (5位)」を受賞しました。

「第1回Patient Safety & Quality Award (医療の質・安全大賞)」は、「第24回医療安全管理協議会総会」(5月20日(火)大阪大学)に合わせて開催され、各大学病院等における医療安全・医療の質の向上に関する取り組みを発表し共有することで、各施設が医療安全の一層の推進を図ることを目的としています。

同大賞には39施設から応募があり、1次審査(書面)を通過した11施設が2次審査で発表を行い、45施設と選考委員11名の投票により、「最優秀賞」「優秀賞」「奨励賞」を決定しました。

本院は、「外来診療 患者誤認防止システム 一前線・中盤・最終ラインで守る」をテーマとした発表を行いました。

発表では、診療券と患者が一体となって動くことにより、外来で診察を開始し終了するまでの3つの場面で患者誤認を

防止するシステムを構築したこと、本年1月～3月の期間で患者誤認を防止できた事例が25件あることを説明しました。

選考委員からは、患者参加型の安全対策として高く評価されました。

また、他施設からは、人工呼吸器・モニターの安全使用、RRS (Rapid Response System) 導入に関する取り組み等、本院にも大変参考になる発表があり、今後、一層の医療安全管理推進を図っていく所存です。



授賞式: 奨励賞(右から3人目が小山内GRM)



米国熱帯医学・衛生学会国際名誉会員に 推挙されて

Honorary International Fellow of the American Society of
Tropical Medicine and Hygiene

旭川医科大学名誉教授、客員教授 伊藤 亮

写真提供：米国熱帯医学・衛生学会

この様な記事を自分で書くのはおかしいかと思いますが、定年から3年が経過したこともあり、この名誉会員にまつわる話を定

年後の活動報告もかねて書いてみます。

2014年、第63回米国熱帯医学・衛生学会の開会式(2014年11月2日、ニューオーリンズ)で、ビル・ゲイツ氏の特別講演に引き続き授賞式が執り行われ、私を含む5人が2014年度の国際名誉会員に推挙されました。私を推薦して下さった方々は米国疾病対策情報センター(CDC:Centers for Disease Control and Prevention)の元寄生虫部副部長Peter Schantz博士(1986年からの友人、76歳)、2014年にメキシコ市で開催された国際寄生虫学会の大会長をされたAna Flisser 教授(1982年からの友人)、WHO本部で長年寄生虫病対策部長を務められたポーランドのZbigniew Pawlowski教授(1982年からの友人、90歳)、WHOエキノコックス症非公式作業部会、前部会長を務め、2000年から2008年まで米国立衛生研究所RO-1研究事業「中国におけるエキノコックス症伝搬生態学、疫学研究」代表を務めた英国のPhilip Craig教授(1986年からの友人、61歳)、上記のRO-1研究事業を多国間共同事業として展開した中国奥地で、一緒に仕事をした米国のChristine Budke博士(2000年からの友人)の5人です。今回一緒に受賞したDavid Molyneux教授はリバプール大学熱帯医学校の校長(学長)、英国王立熱帯医学・衛生学協会代表を務めてこられた先生で、Craig教授がサルフォード大学に講師として着任した時の教授で、その後リバプール大学に栄転。狭いものです。

この米国学会は世界の熱帯医学研究者の研究組織として最大の組織で、American Journal of Tropical Medicine and Hygiene (IF:2.736)を学会誌として出版しています。本学会は1903年に設立され、設立とともに、北里柴三郎博士が国際名誉会員に推挙されています。学会として国際名誉会員制度を導入したのが1963年、最初の名誉会員は台湾のHsien-Chen

Hsieh教授、1971年に2番目の名誉会員として東大医科学研究所元所長、富山医科薬科大学の初代学長を務められた佐々学教授、3人目がタイのマヒドン大学熱帯医学部の創設者、Chamlong Harinasuta教授、1979年です。私を推薦して下さったPawlowski教授は13人目の名誉会員として1990年に推挙されています。日本人では不肖、私が3人目になります。でも、実際のところ、なぜ私が?と思っています。上記学会の姉妹学会として英国の王立熱帯医学・衛生学協会があり、Royal Society of Tropical Medicine and Hygiene (IF:1.931)を出版しています。

Hsieh(謝)教授は米国で医学教育を受けた医学者で1995年に米国寄生虫学使節団員(Citizen Ambassador Program Parasitology Delegation)としてモンゴルに出かけた時にご一緒し、その後数年間、お亡くなりになられるまで、日本、台湾で直接ご指導いただきました。本学でチュートリアル事業の導入に当たり、学術交流調印を結んだ米国マーサー大学で、調印に尽力されたLin(林)名誉教授から大学で同期生だったと伺いました。このモンゴル訪問には上記のPawlowski教授も参加され、二人でエキノコックス症に関する講演を引き受けました。私は血清診断法、Pawlowski先生は臨床病理学と世界での流行の実態について話されました。これがモンゴルでのエキノコックス症対策研究のきっかけです。早いもので、20年になります。

私は1982年に初めて海外に出かけました。35歳でした。岐阜大学の友友弘士教授の鞆持ちで、マニラに出かけ、阪大微生物病研究所の中林敏夫教授、帯広畜産大学の鈴木直義教授(前学長)とご一緒させていただきました。鈴木先生にはその後随分お世話になりました。大きなインパクトを与えて下さったのが、日本住血吸虫症の免疫学的研究を展開するためフィリピン大学公衆衛生学部滞留されていた「免疫中枢のT細胞の発見者」である、オーストラリアのGraham Mitchell博士、「アジアの寄生虫病研究とアジアの研究者育成」に自分の半生を捧げた米国のJohn Cross教授との出会いでした。

同年秋にチェコスロバキアのCeske Budejoviceで開催さ

れた小さな国際囊虫症会議の案内がWHOのPawlowski博士から届き、英語も十分に話せないのに、家族の応援もあり、私費で参加しました。当時の岐阜大学学長、早野三郎先生(眼科学)から旅費を大学に寄付する形を取り、研修ではなく出張で出かけなさいと助言いただきました。私費参加は当たり前前の時代でした。2週間電話のかけ方も知らず音信不通で、列車でプラハからパリに出てホテルから電話をした時に、妻が「亮さん生きていたわよ〜!」と電話口で家族に嬉しそうに話したのが今も懐かしく思い出されます。もちろんアジアからの参加者は私一人。この地方都市での会議に引き続き、プラハでWHO囊虫症ガイドライン作成会議を実施するので、伊藤博士は著者、助言者、どちらで参加しますか?著者として参加する場合には膨大な原稿作成の義務がありますが、この会議参加の往復航空券代金をWHOが小切手で支払います!と。英語に自信がなく、助言者として参加し、「しまった、ずうずうしく著者として参加すべきだった」と後悔しました。というのも、分科会の座長の先生が参加者に話しかけて、一人で原稿をまとめたからです。この時、著者として一緒に分科会に参加したのが、メキシコのFlisser教授でした。この時の分科会の座長は英国のEJL Soulsby教授(現Lord Soulsby)です。これがきっかけになり、Soulsby先生から、Immune Responses in Parasitic Infections: Immunology, Immunopathology, and Immunoprophylaxis, vol. 2, pp.115-163, CRC Press, 1987を書くよう命じられました。1995年の米国使節団の団長がCross教授でした。またSARS(severe acute respiratory syndrome)の第一発見者として命を捧げたWHOのCarlo Urbani博士との協力、Carloが「亮、我々は仏教の縁(えにし)によって導かれている」と、だみ声でいつも話しかけてきたのも懐かしい思い出です。国内外の素晴らしい恩師、友人達とのよき交わりで、定年を迎えられ幸せな人生でした。

1998年6月に旭川医科大学に招かれ、久保良彦第5代学長に励ましていただき、「顧みられない感染症」の代表である寄生虫病対策に向けた国際共同研究を馬車馬のように展開してきました。その経緯は北海道医学雑誌76,3-8,2001、84,479-481, 2009、モダンメディア55, 259-268, 2009に書きましたので、ご笑覧下さい。旭川に来られた外国人研究者は延べ200人を優に超えたはずです。

北海道の地方病であるエキノコックス症の血清検査法の開発を表看板とし、迫康仁助教(現教授)の協力を得て診断キット開発に取り組み、同時に中尾稔助教(現准教授)の基礎研究、エキノコックス条虫、テニア条虫の遺伝子解析、遺伝子分類学的研究を支援し、基礎研究に基づく応用研究、疫学研

究を、上記の国際共同研究者の皆様の協力を得て展開しました。エキノコックス、テニア条虫に関する遺伝子分類学の研究では現在世界のトップです。いかに基礎研究が大切かを今、深く噛みしめ直しています。

本学に着任してから今日まで、国際専門誌に250篇以上の論文・総説を、また国際専門書にも22章を執筆しました。お陰様で客員教授として「顧みられない感染症研究室」を使わせていただいております。大学に感謝です。

先日某H教授から「顧みられない感染症」の響きが悪いですね!「稀少疾患」のほうがいいのではないですか?といった助言をいただきました。日本では確かに稀少疾患になっていますが、途上国を中心に蔓延している疾患で、ほとんどが慢性疾患であり、WHOが正式に“Neglected infectious diseases, Neglected tropical diseases”と呼んでいますから、寄生虫病は今後も「顧みられない感染症」として世界で流行し続けると予測しています。さらに問題なのはglobalizationによる、いわゆる途上国から先進国への侵入、再流行があります。マラリアを除く、ほとんどが慢性疾患で、被害が重症例でない表に出てこないため、途上国でも対策予算がつかないままです。その意味で日本では2020年の東京オリンピックが最大の危機になります。

安倍首相の昨年のアフリカ歴訪によるアフリカへの支援の一貫として、「アフリカにおける顧みられない感染症(マラリア、結核、HIV/AIDSを除く)対策事業」が今年度の政府から全世界へのG7発信案件として政府内で議論されています。これらの事業に本学が積極的に参加できる、途上国ならびに講座内の共同研究者の喜びを自分の喜びとして共有できる精神的土壌を大切にしてほしい、笑いが絶えない研究室であってほしい、共同研究の楽しみを共有してきた小さな歴史を大切にしてほしいと祈っています。そして、適当な時期に「顧みられない研究室」になる前に私の研究室を閉じたいと。それまでは皆様温かくご支援ください。今年目標は最低ひと月1篇の総説その他の論文の公表です。1月から5篇公表できました。現在投稿中が3篇、再投稿準備中が1篇です。それ以外に締め切りのある専門書の原稿2篇を抱えています。このような執筆活動の場として客員教授室を使わせていただき、己の知識のお粗末さにうめき苦しみなながらも、結構楽しくボケ防止に努めている毎日です。某T教授が、「今が教育の義務から解放され、一番楽しいでしょう!」と話してくれましたが、本当にそうだなと感じています。今後も「顧みられない感染症の実態」を正確に伝えるささやかな努力を続けたいと思っています。末筆ですが、大学の発展を祈念しております。

旭川医大IFMSA ～Think Globally Act Locally～

IFMSAとは、International Federation of Medical Students' Associationsの略称（日本語名は国際医学生連盟）で、1951年にヨーロッパで設立され、フランスの世界医師会内に本部が置かれている非営利・非政治の国際NGO団体です。

旭川医大IFMSAは、海外から受け入れた留学生と交流することや本学学生が交換留学生として海外の医療を経験することによって、自らの視野を広げるといった目的で、平成21年4月に設立された本学学生団体であり、将来の医療職者として社会に大きな貢献をすることを目指して活動しています。



現在は交換留学に加え、大学の森みどりの保育園で「ぬいぐるみ病院」という活動もしています。ぬいぐるみを患者、子どもをぬいぐるみの親や友達、学生を医療従事者に見立てて病院ごっこを行うことで、子どもの医療への理解や関心を深め医療行為に対する不安感を和らげる手助けをしています。その他にも、学童期サポートの一環として大学職員のお子さんと体験学習や特別授業を行ったり、アフリカで大流行したエボラ出血熱の予防啓発支援キャンペーンを行ったりしています。

薬物使用の怖さを訴え ～高校等への派遣講座～

本学派遣講座の一つとして、高校生や一般住民の方々を対象に薬物乱用防止に取り組んでいます。依存症に関する相談対応の経験をもとに、薬物の心身への影響や当事者・家族の苦悩から薬物の怖さを発信しています。多発する危険ドラッグ等の対策は、取り締まりと同時に未来ある若者たちへの啓発活動が鍵を握ります。薬物に依存した場合の自分を想像してみることで、フラッシュバック、家族や周囲との信頼関係が壊れるなど、失うものの深刻さに気づき、予防の重要性を考える機会になったとの感想も聞かれています。また、ギャンブルや恋愛など様々な依存症があり、身近な問題です。依存症とはコ

ントロールを失う病気です。自分でやめられると思ってもやめられるものではありません。寂しさや満たされなさを抱えるうちに、いつの間にか薬物中心の生活になるということが起こり得るのです。今後も、地域に出向き、薬物の怖さ、予防にはコミュニケーションや今をどう生きるかが大切であることを若者達と一緒に考えていきたいと思えます。



旭川大学高等学校で行った「薬物講座」

障害者クロスカントリースキー・ワールドカップ旭川大会における協力活動

2015年2月13日から19日の7日間、障害者クロスカントリースキー・ワールドカップが旭川において開催されました。旭川医科大学は、この大会の主催団体の一つとして大会運営に協力しましたが、本大会がアジアで開催されるのは今回が初めてのことで、日本障害者スポーツ協会の方から大会開催にあたっての大会視察を依頼されました。ワールドカップに参加するためには、国際パラリンピック委員会（IPC）に属する



クラス分け委員による障害のクラス分けを受ける必要があるのですが、本大会においてもクラス分けが行われるということで、我々の任務としてはクラス分けの視察が主なものでした。また、現在日本

にはこのクラス分けの資格をもつ委員がいないということで、旭川医科大学からクラス分け委員を輩出する取り組みも同時に行うこととなりました。

2014年12月に旭川医科大学から私を含む3名の医師（整形外科2名 眼科1名）が、フィンランドのヴォカッティで開催される障害者クロスカントリースキー・ワールドカップへの視察に派遣されました。クラス分けには、身体障害に対してと視覚障害に対してのものがありますので、我々は二手に分かれてクラス分けの視察を行いました。私は身体障害のクラス分けを見学しましたが、障害の程度を決めるために必要な知識はいわゆる身体所見をとる知識が必要ですが、加えて障害によってどのように競技へのデメリットが生まれるのかを熟知しなければなりません。この過程は自分にとって非常に興味深いものであり、整形外科医としてクラス分けに参加する意義が非常に高いのではないかと感じました。また、クラス分け委員の方々もとても親身に説明して頂

き、非常に有意義な時間を過ごせました(写真中央が、クラス分け委員のリーダーをしていたBjorn Taylor)。帰国後は、主催団体が集まって準備を行いました。視察での経験を十分に活かすことができたのではないかと思います。旭川でのクラス分け当日、私は海外から来て頂いたクラス分け委員の方々のお手伝いをしながら、日本選手団にも通訳などで関わらせて頂きました。

北海道ブロックDMAT災害実働訓練参加報告

2014年9月27日、28日に北海道ブロックDMAT実働訓練が行われました。

毎年恒例の災害医療援助チームDMATの北海道ブロック実働訓練です。今年は当日になるまでどこが発災場所かは分からない本格的な訓練でした。早朝6:30、携帯メールにDMAT運営事務局より発災の連絡がありました。「釧路で発災です!」。地震多発地帯の釧路は、北海道の災害医療で避けては通れない場所です。すぐに荷造りを開始し、釧路へ向け出発しました。当日訓練で実際に用いる予定の釧路市と王子製紙が開発した段ボール製の応急ベッドの実演がありました。段ボールが予想外に強く、およそ800kgの荷重に耐えることなどを学びました。夜は、いざというときに日本各地で一緒に働くことになる道内DMAT隊員間の親睦を深め、互いに顔の見える関係を築くための懇親会に参加し、本部指定の宿泊場所に向かいました。

旭川医大チームは、隊長の鈴木が北海道で15人目の統括DMAT認定を受けたばかり(院内では藤田救急部長について2



人目)のため、統括業務の中でも比較的新しく提案された病院支援業務を振り分けられ、釧路孝仁会病院に向かうことになりました。病

今回の視察から大会運営において、海外のクラス分け委員の方々とも関係を作ることができ、また日本選手団にも日本からクラス分け委員を作る意味を感じてもらえたのではないかと思います。今後も、本大会が旭川で継続的に行われていく可能性は高く、我々も引き続き協力していけるよう体制を整えていく必要性を感じています。

院支援とは、被災した病院に出向き、①院内の指揮命令系統の確立と、DMATの病院支援本部設置 ②施設被災状況の調査 ③院内患者の診療継続の可否判断 ④来院患者のトリアージ支援 ⑤広域災害医療情報システムへ情報を入力し、支援の必要性を報告 ⑥搬送の支援を行うといったものです。本部を立ち上げたのち、赤タグの重症3名を網走DMATと共に診察し、2名の広域搬送が必要と判断しました。



最終的には、釧路ドクターヘリでの搬送が決まり、とんぼ返りで戻ってきたドクターヘリに患者を乗せ、搬送支援業務を無事完遂しました。

訓練が終了したのは13:30頃でしたが、その後、拠点病院に戻って反省会を行ったのち、15:00に釧路を離れ帰途につくことになりました。二日間にわたる訓練でしたが大変充実した研修でした。

病院及び関係スタッフ及び事務サイドのご理解、ご協力のもと訓練に参加させていただいたことに感謝申し上げます。



地域に密着した救急医療の充実 (ドクターカー)

旭川医科大学病院は、平成22年10月に北海道から救命救急センターの指定を受け、3次救急医療機関(高度医療が必要な重篤患者さんへ対応する救急医療機関)として、24時間365日の診療を行っております。

この度、地域の救急医療のさらなる充実を目指すため、救急車、ドクターヘリに続く第3のプレホスピタルケア(病院前救急診療)として、近隣の自治体との協働で、平成27年4月1日(水)から「ドクターカー」の試験運用を開始することとなりました。ドクターカーとは、重度の傷病者の救急車搬送において、消防本部からの要請により、医師・看護師等をいち早く救

急現場や搬送中の救急車に派遣する車両のことです。

この試験運用では、各自治体に所属する消防本部が救急措置上有効であると判断した場合に、旭川医科大学病院救命救急センターにドクターカーの出動を要請し、対応可能な場合にドクターカーが出動することとしています。



「スポーツと健康」シンポジウムが開催されました

旭川医科大学は「スポーツと健康」シンポジウムを平成27年2月13日旭川市民文化会館にて開催しました。本学脳機能医工学研究センターに所属し全日本女子バレーボールチーム・ドクターを務める小原和宏医師がスポーツ医学を一般市民向けに講演しました。特別講演として長野オリンピックスキースキーノルディック複合日本代表の荻原次晴氏をご講演をされ、若い人への熱いエールを送りました。パネルディスカッションでは、吉田貴彦学長補佐の司会により、以上二人に加

え、バンクーバーパラリンピッククロスカントリースキー・スプリント・クラシカル銀メダリストの太田渉子氏、松野丈夫病院長、船越洋教授の5名による意見交換が行われました。貴重なアスリートの体験談や選手が望むスポーツ医学、医師の立場からは最新のスポーツ医学の話などがありました。スポーツは健康を維持する上で非常に大事な分野であり会の参加者も増加すると考えられ、それに応えるべく継続する予定です。

北海道メディカルミュージアム

どこに住んでいても最新の医学知識が学べる「北海道メディカルミュージアム」は、遠隔医療センターをインターネット放送局として道内各地に同時中継している医療公開講座です。2003年の第1回目から現在まで48回開催しています。インターネットに接続できるPCがあればすぐに参加できるため利尻、羽幌、紋別、中富良野など道内十数か所に会場を作って毎回多くの地域住民の方が受講しています。講演終了後には地域の保健師からフォローアップの講話があり地域の保健活動に役立てています。



中富良野町



岩見沢ケアハウス

●オンデマンドでビデオ受講

遠隔医療センターでは、これまでの講演映像をいつでもどこからでも視聴できるようにインターネット上にWebサイトを開設しています。メディカルミュージアムに参加できない人やもう一度聞きたいといった場合に無料で何度でも繰り返し受講することができます。

「旭川医科大学ホームページ」の「社会貢献・地域貢献」→「メディカルミュージアム」

からご覧ください。



オープンインターネットカレッジホームページ

AWBC学生組織「はしっくす」2014年度の活動

●旭川のまちを活性化!

極寒の街、旭川。そんな旭川の駅前をキャンドルの灯であたたためようといった目的で毎年行っている「あったかいね、あさひかわ」も昨年で4回目となりました。キャンドルだけではなく、今回は駅ナカのブースも充実しており、大盛況をおさめました。冬のイベントだけでなく、夏には旭川の中高生に水の大切さを学んでもらおうという目的のもとで行った「学生合同サマーキャンプ」、大学生と中高生の交流の場、定期イベント「かたるべっ!」なども開催し、異世代交流も積極的に行っています。



昨年4回目を迎えた「あったかいね、あさひかわ」

「学生合同サマーキャンプ」

旭川医科大学派遣講座実施状況

派遣講座は、本学の教員などが地方自治体、高等学校などの求めに応じて講演を行うもので、さまざまな内容の講座を用意しています。347種類の講座があり、内科外科など臨床医学分野をはじめとして、身近な問題である健康や生活習慣病など、多彩な医学分野を取り扱っています。また、医学に留まらず心理学や歴史といった一般教育、高等学校向けの医療職

への進路、青少年の諸問題といった講座もリストに加わっています。

2014年度は187件の講座を全道にわたって実施しました。詳細は本学ウェブサイトをご覧ください。

http://www.asahikawa-med.ac.jp/index.php?f=cooperation+public_dispatch

派遣講座分野別実施件数

分野	件数	分野	件数
医療について	14	骨・関節の病気	3
教育	2	皮膚の病気	4
学校と教育	7	耳・鼻・のどの病気	2
学校と健康	0	妊娠・出産	1
思春期	5	妊娠・出産・育児	0
検査 (画像診断)	1	小児育児	1
地域看護	8	小児神経	1
薬剤	3	予防医学	0
からだのしくみ	19	脳科学	0
健康	7	切らずに治す治療法	0
食べ物と健康	6	移植	0
睡眠と健康	4	更年期障害	0
アルコールと健康	0	更年期女性	2
労働と健康	3	高齢者と健康	2
家族健康管理	0	高齢期の心の健康	0
アレルギー	3	高齢者	5
感染症	2	心理学	2
HIV看護	1	乱用薬物	4
がん	2	東洋医学	0
ストレスとがん	0	地域保健看護	7
生活習慣病	14	新生児集中ケア	0
高血圧	2	手術看護	0
糖尿病看護	0	医療のあゆみ	0
病理学	0	現代史	0
脳・神経の病気	6	地域史	0
肺の病気	1	医療と文学	0
血管の病気	1	その他	8
救急医学	11	精神科看護	1
遺伝	2	動脈硬化	1
がん化学療法看護	1	眼の病気	3
緩和ケア	1	寄生虫学	1
高齢期の心の健康	2	がん放射線療法看護	1
スポーツ医学	2	未分類(年度途中 新テーマ)	8
小計	130	小計	57
合計			187

派遣講座地域別実施件数

市町村名等		件数	市町村名等		件数	
旭川市	旭川市	94	旭川市以外	札幌市	7	
					千歳市	1
					江別市	4
					小樽市	1
					仁木町	1
					美瑛市	1
					芦別市	2
					岩見沢市	1
					滝川市	2
					砂川市	0
					深川市	2
					由仁町	1
					長沼町	4
					雨竜町	1
			北竜町	0		
上川地方	旭川市以外		胆振地方	苫小牧市	1	
				室蘭市	2	
			日高地方	新ひだか町	0	
				平取町	1	
			渡島地方	函館市	2	
				留萌市	3	
			留萌地方	遠別町	1	
				苫前町	0	
				小平町	1	
				天塩町	0	
			宗谷地方	稚内市	2	
				枝幸町	1	
				浜頓別町	0	
			オホーツク地方	北見市	3	
		紋別市	5			
		網走市	1			
		清里町	1			
		斜里町	0			
		滝上町	1			
		佐呂間町	0			
	十勝地方	帯広市	3			
		清水町	0			
	釧路地方	釧路市	1			
	根室地方	根室市	1			
		中標津町	4			
	小計	62				
	合計	187				

公開講座実施状況

公開講座は、教育研究活動を通して蓄えた知識と成果を地域に還元するとともに、地域住民の方々に学習の機会を提供することを目的に、1986年度にスタートしました。2014年度は

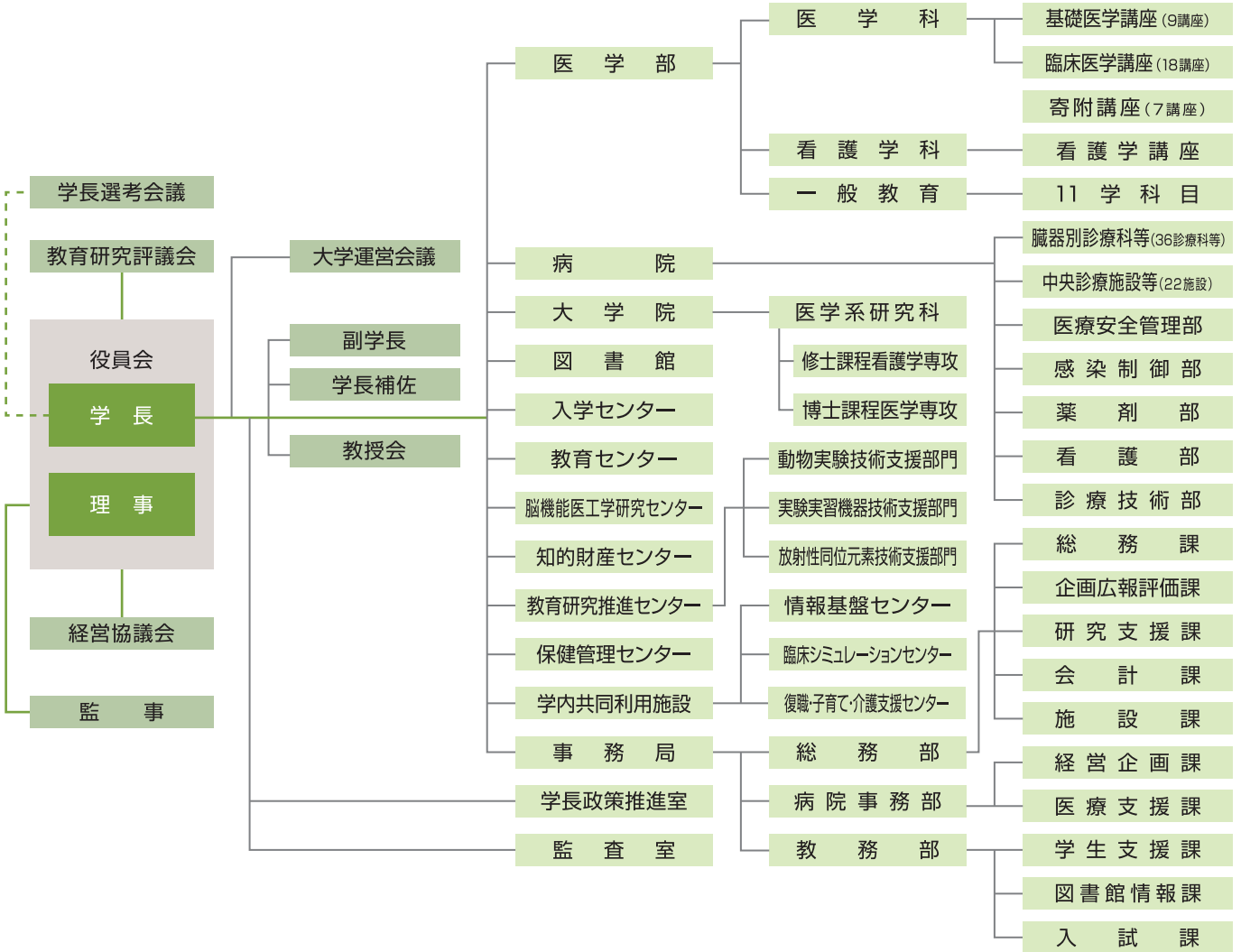


「失われた臓器を求めて」をメインテーマに据えて、全5回の講義を実施しました。

「失われた臓器を求めて」(受講生70名)

- 第1回 9月 12日 再生医療の基礎的な話
- 第2回 9月 19日 脳機能と運動機能の再建について
- 第3回 9月 26日 移植について
- 第4回 10月 3日 人工股関節について
- 第5回 10月 10日 歯の再生について

組織機構図



法人役員数等

平成27年5月1日現在

■法人役員数

学長	理事	監事	計
1	3(1)	2(1)	6(2)

※()内は非常勤役員で内数。

■大学職員数

学長	副学長	教授	准教授	講師	助教	事務技術職員	技能労務職員	医療技術職員	看護職員	合計
1	3(1)	60	41	57	168	183	6	132	700	1,351(1)

※法人役員(学長・副学長)を含む。※()内は教授と兼務で内数。

■学部学生数

区分	入学定員	1学年	2学年	3学年	4学年	5学年	6学年	計
医学科	※1 122	119	126	136	104	123	131	739
看護学科	※1 70	67	55	56	62			240
計		186	181	192	166	123	131	979

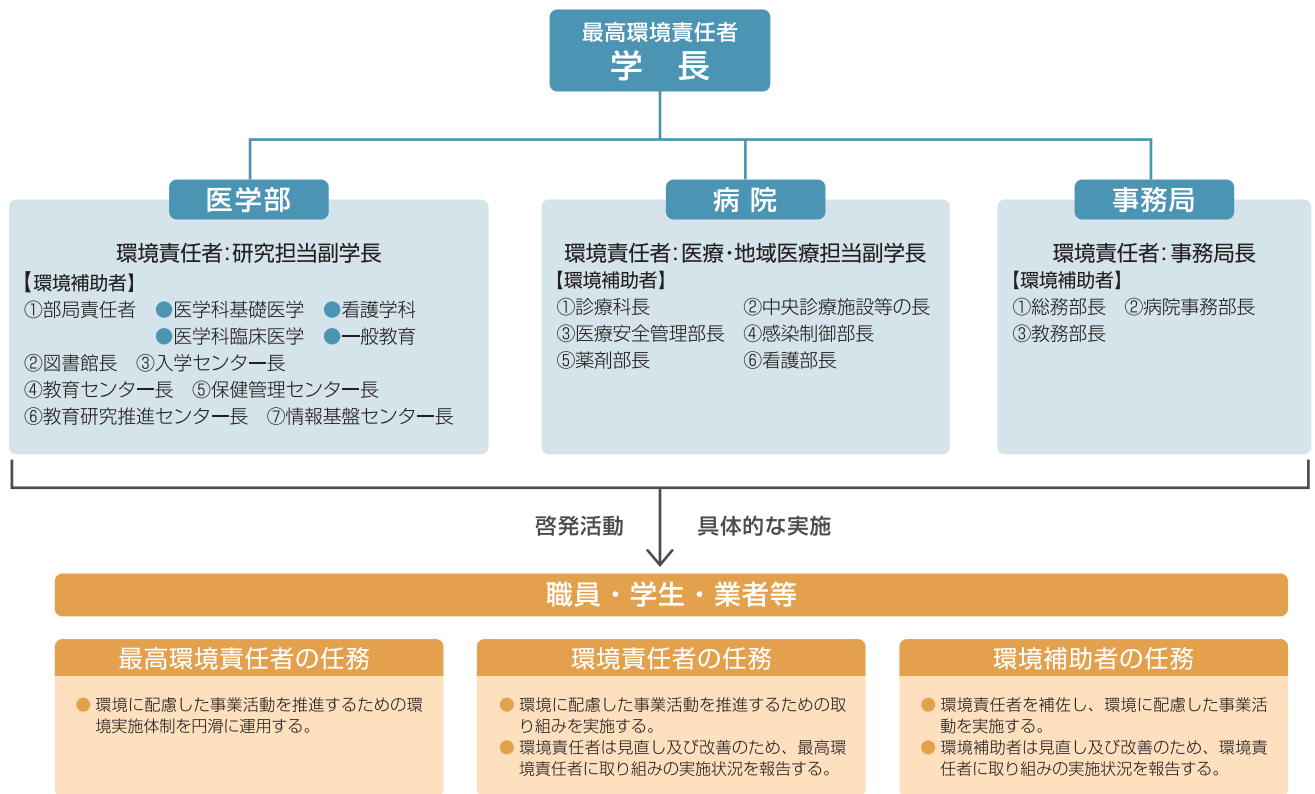
※1 編入定員10を含む。

■大学院学生数

区分	入学定員	1学年	2学年	3学年	4学年	計
博士課程	15	7	10	17	49	83
修士課程	16	12	34			46

環境配慮活動への取り組み体制(大学概要)

実施体制



大学教育及び病院理念と目標

大学の教育理念

豊かな人間性と幅広い学問的視野を有し、生命の尊厳と高い倫理観を持ち、高度な知識・技術を身につけた医療人及び研究者を育成する。また、地域医療に根ざした医療・福祉の向上に貢献する医療者を育てる。さらに、教育、研究、医療活動を通じて国際社会の発展に寄与する医師及び看護職者の養成に努める。

大学の教育目標

旭川医科大学は上記の理念の下にこれらを達成するため、次のような目標を掲げる。

1. 幅広い教養とモラルを養うことにより、豊かな人間性を形成する。
2. 生命の尊厳と医の倫理をわかまえる能力を養い、病める人を思い遣る心を育てる。
3. 全人的な医療人能力や高度な専門知識を得るとともに、生涯に亘る学習・研究能力を身につける。
4. 幅広いコミュニケーション能力を持ち、安全管理・チーム医療を実践する資質を身につける。
5. 地域・僻地住民の医療や福祉を理解し、それらに十分貢献しうる意欲と能力を獲得する。
6. 積極的な国際交流や国際貢献のための幅広い視野と能力を習得する。

病院の基本理念

大学病院としての使命を認識し、病める人の人権や生命の尊厳を重視した先進医療を行うとともに、次代を担い、地域医療に寄与し、及び国際的にも活躍できる医療人を育成する。

病院の目標

1. 病める人を思い遣る患者中心で心の通い合う医療を行う。
2. 全人的医療と先進医療との調和を図り、人間本位の医療を提供する。
3. 予防・健康医学などに積極的に取り組み、地域医療や福祉の向上に寄与する。
4. 病める人の人権を尊重し、生命の尊厳がわかる人間性豊かな医療人を育成する。
5. 未来の医療を創造し、その成果を国内外に発信する。

環境目標・計画と自己評価(平成26年度)

本学では、2014年度の環境保全活動における環境目標・計画と自己評価を記載します。

平成27年3月31日

環境方針	目標	計画	評価
環境負荷の低減	エネルギー使用量の削減	冷暖房時の室内設定温度の徹底	○
		隣階層へのエレベータ利用の抑制	○
		昼休み時等の消灯	○
		こまめな消灯の徹底	○
		高効率照明器具への更新	◎
		照明器具のセンサー化への実施	◎
		クールビズ、ウォームビズの実施	◎
		OA機器の省エネモードの設定	○
	環境汚染の防止 (日常的な軽微な汚染の回避) (化学薬品等の安全管理)	空調機の省エネ性能の高い製品への更新	◎
		節水型装置、器具導入の促進	◎
		廃棄物の分別の徹底による排出量の削減	○
		両面印刷の徹底及び電子メール等の活用	○
		古紙回収の拡大とリサイクルの促進	◎
		廃棄物のマニフェストの完全実施	◎
教育・環境活動及び法令の遵守	環境教育 (環境教育の充実) (法令の遵守)	ガスボンベの安全管理及び保管量の確認	◎
		化学物質の安全管理及び保管量の確認	○
		実験用設備(ドラフト、薬品棚)の安全管理	○
		環境関連教育の充実	◎
		環境関連施設での実地学習	◎
グリーン購入の推進	本学グリーン調達方針に基づく調達の推進	実験用廃液の完全回収	◎
		消防法の遵守(保管量、保管方法の確認)	○
		特別管理産業廃棄物の処理の適正化	◎
地域社会との交流	地域社会への積極的な情報発信と啓発	環境に配慮した製品、事務用品等の優先購入	◎
		省エネ機器・設備の優先購入	◎
		再生品及びリサイクル可能な製品の購入	○
		環境報告書の公表	◎
		講演会、研修会への啓発活動	◎
その他	環境及び景観の維持向上	公開講座等の実施	◎
		学生の地域交流の積極的参加	○
		自治体主催の委員会等への参加	◎
		大学敷地内全面禁煙	○
		たばこのポイ捨て禁止	○
		排水基準の遵守	◎
		ボランティア活動の積極的参加	○

注) 自己評価の、◎印は目標を充分達成している、○印はおおむね達成している。

環境報告書記載事項等の対応表

環境配慮促進法に基づく記載事項等	概略	記載内容	掲載頁
1. 事業活動に係る環境配慮の方針等	事業者(法人であるときは、その代表者)の緒言	学長ごあいさつ	02
	事業活動に係る環境配慮についての方針又は基本理念	旭川医科大学環境方針	01
2. 主要な事業内容、対象とする事業年度等	主要な事業内容、事業年度又は営業年度及び組織の範囲	環境報告書の作成に当たって	30
		環境配慮活動への取り組み体制(大学概要)	21-22・23
3. 事業活動に係る環境配慮の計画	事業活動に係る環境配慮についての目標及び当該目標を達成するために行う取組を定めた計画	環境目標・計画と自己評価(平成26年度)	24
4. 事業活動に係る環境配慮の取組の体制等	事業活動に係る環境配慮についての目標を達成するために行った取組に係る体制及びその運営方法	環境配慮活動への実施体制	23
5. 事業活動に係る環境配慮の取組の状況等	事業活動に係る環境配慮についての目標を達成するために行った取組の状況及び事業活動に伴う環境への負荷のうち一定以上の重要なものの程度を示す数値	事業活動に伴う環境負荷低減への取り組み	25~28
	事業活動に伴う環境への負荷のうち一定以上の重要なものの決定は、事業者が当該環境への負荷の程度及び環境報告書の利用者にとつての有用性の程度を考慮して行う		
6. 製品等に係る環境配慮の情報	事業者が環境への負荷の低減に資する製品その他の物の製造等又は役務の提供を行ったときは、当該製品その他の物又は役務に係る環境への負荷の低減に関する情報	(該当なし)	—
7. その他	環境関係法令に基づく規制について行った対応、その利用者等との間において行った意見交換等の概要	第三者意見	30

事業活動に伴う環境負荷低減への取り組み

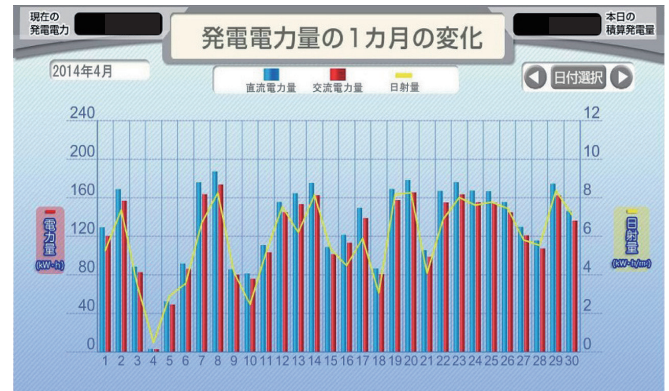
太陽光発電

本学では、図書館屋上に30kWの太陽光発電設備を設置し、2009年12月より発電を開始しています。

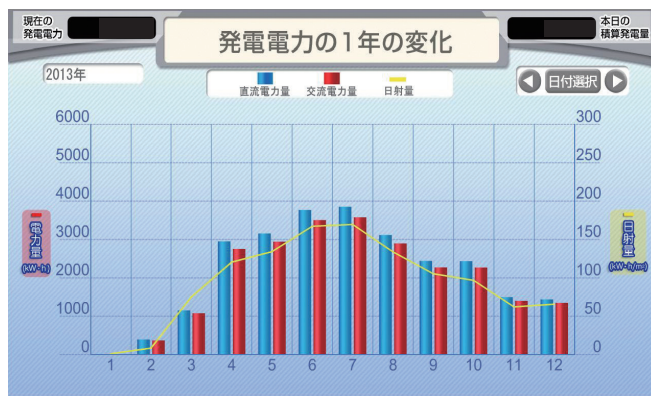
2014年度の発電電力量は約26,650kW・hでした。

グラフは、中央玄関前に設置したモニター画面の表示で、上段は2014年の発電電力量が最も多かった4月、中段は2013・2014年の1年間の発電電力量の変化を月毎の形式で表示しています。

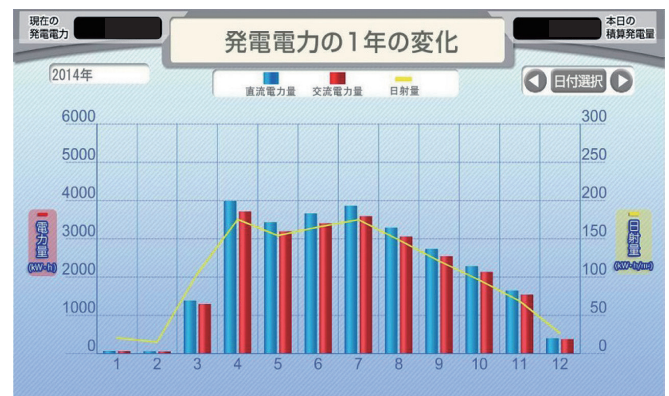
下段は、中段と同様に2011・2012年の変化を表示しています。



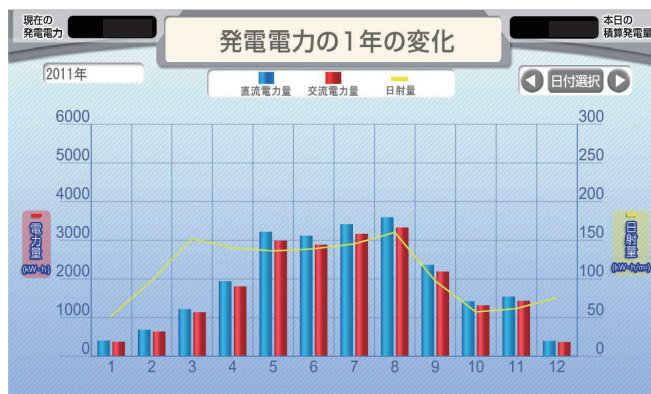
2014年4月 発電量3,708kW・h



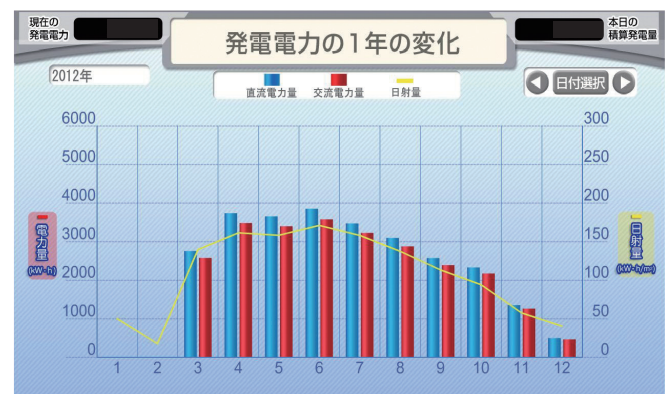
2013年度 発電量24,349kW・h



2014年度 発電量26,647kW・h



2011年度 発電量22,045kW・h



2012年度 発電量24,287kW・h

グリーン購入・調達状況

本学では、「国等による環境物品等の調達の推進等に関する法律(グリーン購入法)」の規定に基づき、毎年度その調達実施に向けての方針を決定し、環境負荷低減に資する環境物品等の調達に努めています。今後とも基本方針を遵守し、環境負荷等の少ない物品等の調達に努めていきます。

■特定調達物品の調達量

分野	適用(品目)	全調達量	特定品目調達量	特定品目調達率(%)
紙類	コピー用紙等	92,958kg	91,522kg	98.45
文具類	シャープペンシル等	216,023点	144,981点	67.11
オフィス家具等	いす等	850台	850台	100.00
OA機器	コピー機等	170台	170台	100.00
	記録用メディア、電池、電卓、トナー、インクカートリッジ等	44,177個	44,175個	99.99
携帯電話	携帯電話等	0台	0台	100.00
家電製品	電気冷蔵庫等	18台	18台	100.00
照明	蛍光灯照明器具等	2,538本	2,538本	100.00
消火器	消火器	1本	1本	100.00
制服・作業服	制服等	2,968着	2,956着	99.59
インテリア・寝装寝具	カーテン等	51点	51点	100.00
作業手袋	作業手袋(防災用を含む)	8組	8組	100.00
その他繊維製品	ブルーシート等	14点	14点	100.00
役務	印刷等	8,065件	7,727件	95.80

旭川市の気象条件

単位:日(ただし積雪量・降雪量(cm)は除く)

	2011年度					2012年度					2013年度					2014年度				
	日平均 気温	日最高 気温	日最低 気温	降雪	積雪	日平均 気温	日最高 気温	日最低 気温	降雪	積雪	日平均 気温	日最高 気温	日最低 気温	降雪	積雪	日平均 気温	日最高 気温	日最低 気温	降雪	積雪
25℃以上の日数	9	69				10	81				8	73				3	78			
28℃以上の日数	0	32				0	39				0	47				0	39			
30℃以上の日数	0	16				0	18				0	20				0	15			
32℃以上の日数	0	3				0	4				0	2				0	4			
35℃以上の日数	0	0				0	0				0	0				0	1			
0℃以下の日数	128		161			129		155			114		149			101		166		
-10℃以下の日数	27		71			23		61			15		48			5		25		
-15℃以下の日数	0		34			3		32			5		17			0		10		
-20℃以下の日数	0		7			0		4			0		6			0		3		
-25℃以下の日数	0		0			0		0			0		0			0		0		
降雪日数				96					105					87					70	
日最大降雪量 (cm)				18					37					23					25	
累積降雪量 (cm)				532					596					541					400	
積雪日数					140				153					147					136	
最深積雪量 (cm)					94				108					89					25	

事業活動に伴う環境負荷低減への取り組み

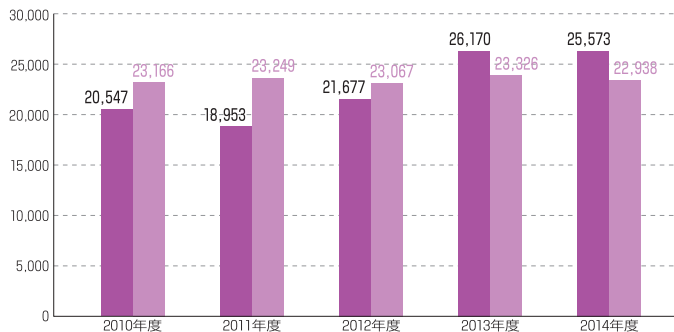
エネルギー・資源の使用量 (2010年度～2014年度 5カ年の推移)

本学におけるエネルギー・資源の使用量に対する推移を、過去5年間分のグラフで表示しました。
 エネルギーの使用量については、前年度(2013年度)に比べて購入電力量はほぼ横ばいでガス使用量は-2.8%減となっており、CO₂の排出量は-2.3%の削減となっています。



温室効果ガス(CO₂)排出量(t-CO₂)

■ 北海道電力株のCO₂排出係数(年度変動)で算出
 ■ CO₂排出係数を一定(デフォルト値:0.555)にして算出

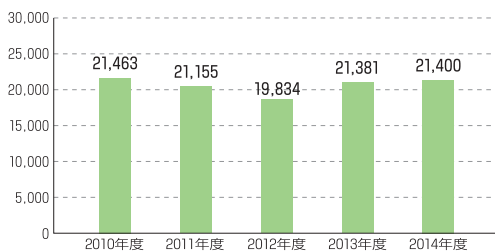


CO₂排出量の過去5年間の推移はグラフのとおりですが、原子力発電所の運転停止に伴い、CO₂排出係数の変動(※1)により、前年比-2.3%の削減となりました。
 電気事業者の排出係数は、毎年の実績に基づいて決定しているため、電力使用事業者の実情が数字に反映されないため、排出係数を一定(※2)にして算出し比較しています。

(※1) 北海道電力(株)の排出係数(kg-CO₂/kWh)
 2010年:0.433 2011年:0.353 2012年:0.485
 2013年:0.688 2014年:0.678



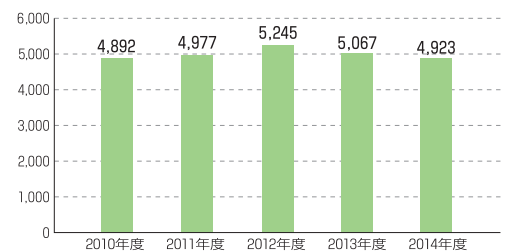
購入電力量(千kW・h)



購入電力量は前年度と比べほぼ横ばいとなりました。(前年度までに記載された2010・2011年度の使用量表記に誤りがありましたので、本報告書において訂正しました。)



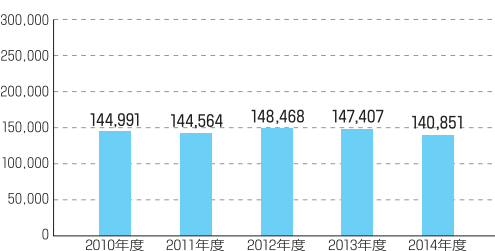
ガス使用量(千m³)



ガス使用量は前年度比-2.8%の削減となりました。例年に比べ平均気温が夏期は低く、冬期は高かったため空調用のガス使用量が減少したものと考えています。(前年度までに記載された2010～2012年度の使用量表記に誤りがありましたので、本報告書において訂正しました。)



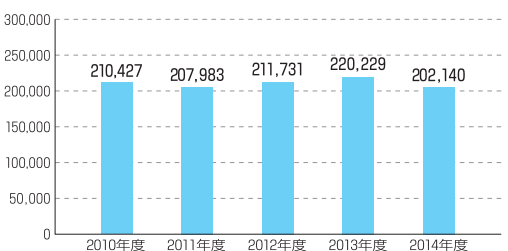
上水道使用量(m³)



上水道使用量は前年度比-4.4%の削減となりました。節水効果の高い機器を改修工事や機器の新規導入時に採用した結果が削減に繋がったと思われます。(前年度までに記載された2012年度の使用量表記に誤りがありましたので、本報告書において訂正しました。)



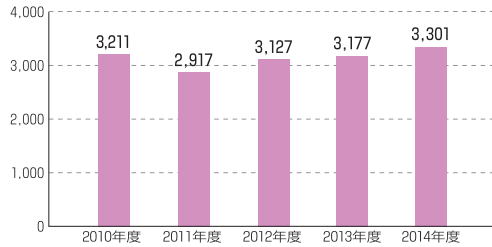
下水道使用量(m³)



下水道使用量は前年度比-8.2%の削減となりました。井水を併用しているため上水道使用量と一致はしませんが、上水道使用量の減少がそのまま反映されているものと思われます。(前年度までに記載された2012年度の使用量表記に誤りがありましたので、本報告書において訂正しました。)



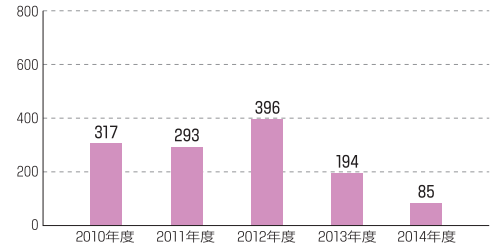
ガソリン使用量 (L)



ガソリンは前年度比3.9%の増加となりました。公用車(主に救急車)の利用頻度の増加によるものと思われます。



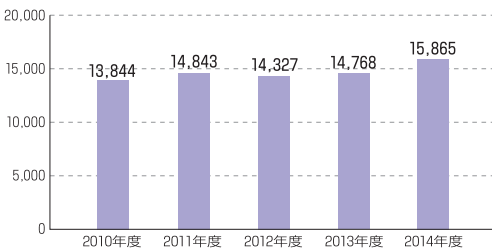
軽油使用量 (L)



軽油は前年度比-56%の削減となりました。昨年の降雪量が例年より少なく除雪車の使用回数や稼働時間の減少によるものと思われます。



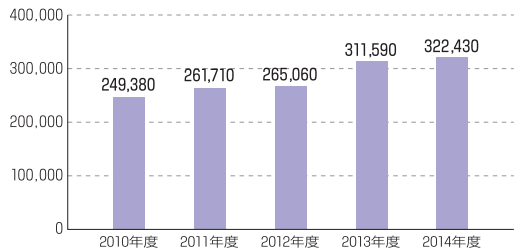
コピー用紙 (千枚) コピー用紙は、A3・A4・B4・B5の合計枚数です。



コピー用紙は前年度比7.4%の増加となりました。患者サービス向上のための出力増加と電子カルテの導入によりシステム上からのアウトプットが可能となりそれに伴った印刷物の増加が主な要因と考えています。(2010年度から2013年度までのサイズ表記と2013年度の用紙枚数表記に誤りがありましたので、本報告書において訂正しました。)



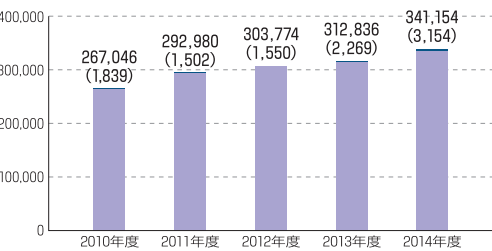
一般廃棄物 (kg)



一般廃棄物は前年度比3.5%の増加となりました。古紙・雑誌等とリサイクル品目(資源ゴミ)の廃棄量の増加や図書館改修に伴う廃棄物の発生が起因と考えています。



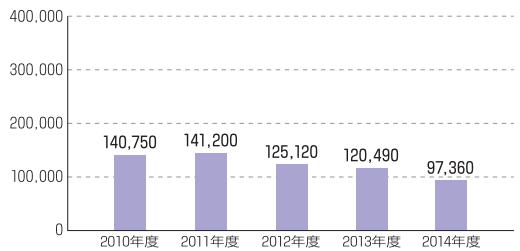
感染性廃棄物 (kg) ()内は実験用動物で内数



感染性廃棄物は前年度比9.1%の増加となりました。実験用動物の処分量が主な要因と考えています。(昨年の報告書において2013年度の廃棄物量の表記に誤りがありましたので本報告書において訂正しました。)



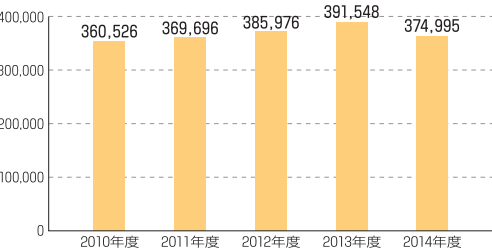
非感染性廃棄物 (kg)



非感染性廃棄物は前年度比-19.2%の削減となりました。リサイクル分別への取り組みの徹底が削減につながったものと考えています。



外来患者数 (人)



【参考】

外来患者数は前年度比-4.2%の減少となりました。

大学機関別認定評価認定証



認定評価認定マーク



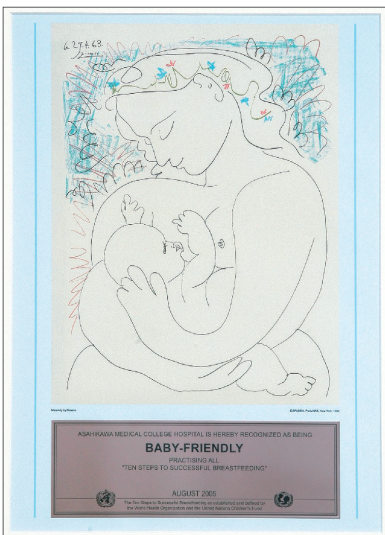
学校教育法第109条第2項の規定に基づき、(独)大学評価・学位授与機構による「大学機関別認定評価」を受け、平成20年3月27日付けで「大学評価基準を満たしている」との認定を受けました。

ホスピレート認定証



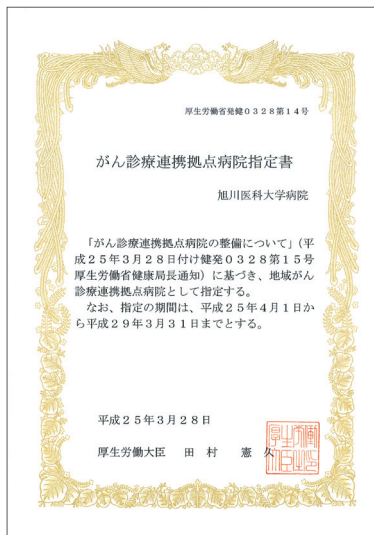
NPO法人イーজেイネットによる、「女性医師を含むすべての医療従事者が安心して働くことができる病院」という観点から病院の働きやすさを評価・認証する「働きやすい病院評価(HOSPIRATE)」の認定を受けています。

赤ちゃんに優しい病院認定証



WHO・ユニセフによる「母乳育児を成功させるための10カ条」を遵守・実践する「赤ちゃんに優しい病院」(Baby Friendly Hospital)に認定されています。

がん診療連携拠点病院指定書



全国各地でも質の高いがん医療を提供できるよう、厚生労働大臣により指定された病院を示します。本院は地域がん診療連携拠点病院に指定されています。

病院機能評価認定証



公益財団法人日本医療機能評価機構の定める基準を満たし、組織的に医療を提供するための基本的な活動の実施が認定されています。

ドクターヘリ施設認定証



結び | 編集後記 |

旭川医科大学では、本学環境方針に則り、地球環境や地域環境の保全・改善のための教育・研究・診療および開かれた大学としての社会貢献など、すべての活動を通して環境との調和と環境負荷の低減に積極的に取り組んでいます。

ここに「環境報告書2015」を公表いたします。

今後とも環境保全・改善活動を推し進めてまいります。

第三者意見



北海道大学サステナブルキャンパス推進本部
特任准教授・プロジェクトマネージャー

横山 隆

旭川医科大学環境報告書2015の評価すべき点の第一は、その構成と内容、所謂コンテンツの絶妙なバランスと言えるでしょう。

1ページ目において、旭川医科大学学章とブランドマークを説明し、これを受けた形で、環境方針、その目的である基本理念、目標となる基本方針を一連のものとして掲げています。続いて、基本方針を具現化する大学活動を、教育研究(アカデミックプラン)、病院運営(医科大学の運営として一体不可分な総括的マネジメントプラン)、社会・国際貢献、環境配慮活動への取り組み体制、事業活動に伴う環境負荷低減への取り組み(USR: University Social Responsibility 大学の果たすべき社会的責任)の大きな三本柱について詳述する構成としており、また、見開きの相対する2ページ目に吉田学長・最高環境責任者の力強いトップメッセージを配し、大学としての意思を高らかに宣言しています。

この骨太な構成は、オーソドックスな従来の環境報告書の内容を継承しつつ、報告書の枠組みとしては「USR報告書」のレベルを指向していると言えます。持続可能な大学運営のための財務活動を加えると、完璧なUSR報告書となると思います。これを読むステークホルダーは、最初のこの2ページで、大学が進もうとしている進路とその道程、舵取りとしての明快なトップマネジメントをくみ取ることができると思います。

評価すべき点の第二は、教育研究、病院運営、社会・国際貢献の報告内容です。「地域医療に根ざした医療及び福祉の向上」を建学の理念とされており、地域貢献・地域との関わりを強く指向する素地が大学に根付いている事は予想できたのですが、活動の豊富な事例紹介の中に「地域貢献」と言う一本の軸がしっかりと筋通しされていることに驚きました。

昨今、世界的な課題(Global issue)解決のための活動が大学に強く求められています。世界各地のそれぞれの地域課題(Local issue)が絡み合った集合体が世界的課題とも言えます。旭川医科大学はしっかりと地に足をつけ、その先に世界的課題解決の道筋を見据えつつ、地道に地域医療の課題解決に精進されていることに敬意を覚えます。表面的な数値目標を追い求める性急なグローバル化を指向せず、ローカルな課題解決を確実に積み重ねることにより、国内のみならず海外も含めた各地の地域課題解決に貢献する組織活動と評価されるべきでしょう。

改善すべき点があるとすれば、環境配慮活動への取り組み体制、事業活動に伴う環境負荷低減への取り組みに関する記述だと思います。教育・研究の中で紹介されている環境教育の授業について、授業を行っている先生方のインタビューも含めて紹介記事があれば、学生が興味を感じ、授業選択の助けになると思います。また、環境指標のデータの記載に関しても、「なぜこの値が変化したのか?」、「どんな手を打ったのか?打たなかったのか?」等の考察を加えると、記録を後追いつける環境報告書ではなく、PDCAサイクルを廻すための環境報告書の役割を確かなものにすることができると思います。

今後、大きな三本柱の中項目レベルのそれぞれの活動を、環境方針の中の四つの基本方針と体系づけて整理し、項目毎に毎年PDCAサイクルを廻して活動内容をブラッシュアップ(方針管理)すると、名実ともに旭川医科大学の環境報告書がUSR報告書へとレベルアップすることと思います。期待しています。

環境報告書の作成に当たって

この「旭川医科大学環境報告書2015」は以下により作成しています。

- 参考にしたガイドライン／環境省「環境報告ガイドライン2012年版」
- 対象組織／旭川医科大学
- 対象期間／平成26年4月～平成27年3月
- 発行期日／平成27年9月
- 次回発行予定／平成28年9月

作成部署お問い合わせ先
旭川医科大学総務部施設課
〒078-8510 旭川市緑が丘東2条1丁目1番1号
TEL (0166) 68-2165 FAX (0166) 68-2169
E-mail / s-manage@asahikawa-med.ac.jp
この環境報告書は本学ウェブサイトでも公表しています。
URL http://www.asahikawa-med.ac.jp/index.php?public+k_sonota
ページ中段の環境報告書よりダウンロード

— 表紙の説明 —

— 旭川 — 3つの大きな川を有する水の街。
旭川医科大学は、その清水豊かな街のなか
で地域医療の充実と発展に向けて努力を続け
ています。水をモチーフにした清潔感あふれ
るデザインは医療に真摯に取り組む姿勢を表
現しています。



国立大学法人

旭川医科大学

〒078-8510 旭川市緑が丘東2条1丁目1番1号
TEL 0166(65)2111 FAX 0166(68)2169
<http://www.asahikawa-med.ac.jp/>